

千葉県八千代市

# 阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ

1984・3

八千代市遺跡調査会

# 序 文

近年、開発の進む本市にあって、その変貌は著しいものがあります。しかしそれに伴ない埋蔵文化財の調査も増加しており、八千代市の原始・古代の姿が解明されていく反面、貴重な先人たちの文化遺産が失われていくという側面も持っています。そのため不注意な行為によって文化財が失われることのないよう、私たちは努めていかなければなりません。

今回ここに報告する「阿蘇中学校東側遺跡」は、八千代中央霊園の霊園拡張と寺院建立に伴ない、千葉県教育委員会、八千代市教育委員会と事業者が最善の方法を求めて協議を重ねた結果、記録保存の処置を講じることとなり、調査を実施したものです。調査においては八千代市の原始・古代を解明するうえで、多大な成果をあげることができました。

これら成果をまとめた本書が、各地の歴史や文化財を考える資料のひとつとなることを願うとともに、多くの方々に活用されることを念じております。また調査にあたって参加いただいた方々に対し感謝申しあげるとともに、その他関係各位に対し深甚なる謝意を表する次第です。

昭和59年3月

八千代市遺跡調査会

会 長 蜂 谷 昭 夫

# 例 言

1. 本書は千葉県八千代市米本（よなもと）字山谷に所在する、阿蘇中学校東側遺跡の第Ⅲ次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は千葉県教育委員会の指導によって、八千代市教育委員会を事務局とし、八千代市遺跡調査会を組織して実施した。
3. 調査は八千代中央霊園の霊園拡張及び寺院設立に伴ない実施されたもので、第Ⅲ次調査は確認調査を昭和57年6月～7月にかけて、本調査を昭和58年1月24日～6月6日にかけて、藤原均を担当者として実施した。
4. 原稿の執筆にあたっては、Ⅰを朝比奈竹男が、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵを藤原均が担当した。
5. 遺物・調査記録等は、八千代市教育委員会が収蔵・保管している。
6. 調査及び整理に関して、下記の方々の御指導、御協力を得ており、記して謝辞としたい（敬称略）。

成田市郷部北遺跡調査会・日本考古学研究所・有限会社山賀興業・三角屋商店  
鈴木道之助・太田文雄・佐久間豊・柿沼修平・寺内博之・喜多庄助・星忠

7. 調査組織は以下のとおりである。

会 長 蜂谷昭夫（八千代市教育委員会次長）

事務局 清水盛人（八千代市教育委員会社会教育課長）

小笠原和也（八千代市教育委員会社会教育課文化係長）

朝比奈竹男（八千代市教育委員会社会教育課文化係主事）

秋山利光（八千代市教育委員会社会教育課文化係主事）

調 査 藤 原 均（立正大学大学院修士課程修了）  
担 当 者

# 目 次

序	文
例	言
目	次
挿 図	目 次
図 版	目 次

I. 調査に至るまでの経過	1
II. 調査経過	2
III. 位置と環境	3
IV. 調査結果の概要	7
V. 遺構及び遺物	10
1. 住居址	10
S I - 1 (第15号住居址)	10
S I - 2 (第16号住居址)	12
S I - 3 (第17号住居址)	15
S I - 4 (第18号住居址)	15
S I - 5 (第19号住居址)	19
S I - 6 (第20号住居址)	19
S I - 7 (第21号住居址)	23
S I - 8 (第22号住居址)	26
S I - 9 (第23号住居址)	29
S I - 10 (第24号住居址)	29
2. 第2号方形周溝墓	33
3. 土 壙	34
S K - 1 (第5号土壙)	34
S K - 16 (第21号土壙)	36
S K - 19 (第24号土壙)	36
S K - 22 (第27号土壙)	36
S K - 23 (第28号土壙)	37

S K-24 (第29号土壙)	37
S K-26 (第31号土壙)	37
S K-31 (第37号土壙)	37
S K-35 (第38号土壙)	37
4. 炉址及び埋甕	41
5. 基本土層	44
VI. 総括	45

# 挿 図 目 次

第1図	阿蘇中学校東側遺跡と周辺の遺跡	4
第2図	遺跡付近地形図	5
第3図	調査区設定図	6
第4図	遺構配置図(1)	8
第5図	遺構配置図(2)	9
第6図	S I - 1 (第15号住居址) 遺構実測図	11
第7図	S I - 2 (第16号住居址) 遺構実測図	13
第8図	S I - 1・2 (第15号、第16号住居址) 出土遺物実測図	14
第9図	S I - 3 (第17号住居址) 遺構実測図	16
第10図	S I - 4 (第18号住居址) 遺構実測図	17
第11図	S I - 4 (第18号住居址) 出土遺物実測図	18
第12図	S I - 5 (第19号住居址) 遺構実測図	20
第13図	S I - 5 (第19号住居址) 出土遺物実測図	21
第14図	S I - 6 (第20号住居址) 遺構実測図	22
第15図	S I - 7 (第21号住居址) 遺構実測図	24
第16図	S I - 7 (第21号住居址) 出土遺物実測図	25
第17図	S I - 8 (第22号住居址) 遺構実測図	27
第18図	S I - 8 (第22号住居址) 出土遺物実測図	28
第19図	S I - 9 (第23号住居址) 遺構実測図	30
第20図	S I - 10 (第24号住居址) 遺構実測図	31
第21図	S I - 10 (第24号住居址) 出土遺物実測図	32
第22図	第2号方形周溝墓実測図	33
第23図	S K - 1 (第5号土壙) 実測図	35
第24図	S K - 1 (第5号土壙) 出土遺物実測図	36
第25図	土壙実測図(1)	38
第26図	土壙実測図(2)	39
第27図	土壙実測図(3)	40
第28図	炉址及び埋甕	42
第29図	埋甕出土遺物実測図	43
第30図	土層図	44

# 目 次

- PL-1 S1-1 (第15号住居址)
1. 遺構全景
  2. 遺物出土状況
  3. 出土遺物
- PL-2 S1-2 (第16号住居址)
1. 遺構全景
  2. 遺物出土状況
  3. 出土遺物
- PL-3 S1-3 (第17号住居址)
1. 遺構全景
  2. 方形周溝墓全景
- PL-4 S1-4 (第18号住居址)
1. 遺構全景
  2. 遺物出土状況
  3. 出土遺物
- PL-5 S1-5 (第19号住居址)
1. 遺構全景
  2. 遺物出土状況
  3. 出土遺物
- PL-6 S1-6、9(第20号、第23号住居址)
1. S1-6 遺構全景
  2. S1-9 遺構全景
- PL-7 S1-7 (第21号住居址)
1. 遺構全景
  2. 遺物出土状況
  3. 遺物出土状況
  4. 遺物出土状況
- PL-8 S1-8 (第22号住居址)
1. 遺構全景
  2. 遺物出土状況
  3. 遺物出土状況
  4. 遺物出土状況
  5. 遺物出土状況
- PL-9 S1-10 (第24号住居址)
1. 遺構全景
  2. 遺物出土状況
  3. 遺物出土状況
  4. 遺物出土状況
- PL-10 SK-1 (第5号土壙)
1. 土壙全景
  2. 土層・遺物出土状況
  3. 出土遺物
- PL-11 SK-2、3、4  
(第7号、第8号、第9号土壙)
1. SK-2 土壙全景
  2. SK-3 土壙全景
  3. SK-4 土壙全景
- PL-12 SK-5、6、7  
(第10号、第11号、第12号土壙)
1. SK-5 土壙全景
  2. SK-6 土壙全景
  3. SK-7 土壙全景
- PL-13 SK-8、9、10  
(第13号、第14号、第15号土壙)
1. SK-8 土壙全景
  2. SK-9 土壙全景
  3. SK-10 土壙全景

- PL-14 SK-11、12、13  
(第16号、第17号、第18号土壙)
1. SK-11 土壙全景
  2. SK-12 土壙全景
  3. SK-13 土壙全景
- PL-15 SK-14、15、16  
(第19号、第20号、第21号土壙)
1. SK-14 土壙全景
  2. SK-15 土壙全景
  3. SK-16 土壙全景
- PL-16 SK-17、18、19  
(第22号、第23号、第24号土壙)
1. SK-17 土壙全景
  2. SK-18 土壙全景
  3. SK-19 土壙全景
- PL-17 SK-20、21、22  
(第25号、第26号、第27号土壙)
1. SK-20 土壙全景
  2. SK-21 土壙全景
  3. SK-22 土壙全景
- PL-18 SK-23、24、25  
(第28号、第29号、第30号土壙)
1. SK-23 土壙全景
  1. SK-24 土壙全景
  3. SK-25 土壙全景
- PL-19 SK-26、27、28  
(第31号、第32号、第33号土壙)
1. SK-26 土壙全景
  2. SK-27 土壙全景
  3. SK-28 土壙全景
- PL-20 SK-29、30、31  
(第34号、第35号、第36号土壙)
1. SK-29 土壙全景
  2. SK-30 土壙全景
  3. SK-31 土壙全景
- PL-21 SK-32、33、34、35  
(第37号、第38号、第39号、第40号土壙)
1. SK-32 土壙全景
  2. SK-33 土壙全景
  3. SK-34 土壙全景
  4. SK-35 土壙全景
- PL-22 埋甕・炉址
1. 埋甕出土状況
  2. 埋甕・発掘
  3. 炉址 (1)
  4. 炉址 (2)
  5. 炉址 (3)
- PL-23 遺跡全景
- PL-24 SI-7 (出土遺物)
1. No.1 甕型土器
  2. No.3 壺型土器
  3. No.4 底部
  4. No.2 壺型土器片
  5. No.2 同片
- PL-25 SI-8 (出土遺物)
1. No.1 弥生壺型土器
  2. No.2 壺型土器
  3. No.3 甕型土器
  4. No.4 壺型土器底部
  5. No.5 壺型土器
  6. No.6 弥生式土器口縁部

# I 調査に至る経過

昭和56年4月、宗教法人長福寺より八千代市米本（よなもと）字山谷に所在する、「八千代中央霊園」の拡張及び寺院建立に係わる造成に際し、八千代市教育委員会を經由して、埋蔵文化財の所在の有無の確認と、所在した場合の取扱いについて、千葉県教育委員会へ照会が行われた。既存の霊園については昭和54年に発掘調査（第Ⅰ次調査）が実施されており、弥生時代後期久ヶ原期の竪穴住居址10軒、土壙4基、方形周溝墓1基が検出されている（註1）。照会地はそれに隣接したところであった。

照会地の現状は下草の繁茂した山林で、遺物散布の表面観察は困難な場所であった。このため第Ⅰ次調査にあたった佐藤克巳・星忠氏に連絡をとり、隣接地は集落址としての広がりを考えることは妥当であることなど、貴重な御教示を賜わり、これをもとに該地は阿蘇中学校東側遺跡として扱えられる旨を記して、市教育委員会は県教育委員会へ副申した。

この後、県教育庁文化課担当者による現地踏査も実施され、遺跡の取扱いについて八千代中央霊園・県教育委員会・市教育委員会によって協議が重ねられた。当初の照会面積は14,000㎡と広く、後に進入路（2,000㎡）も追加されたため、数次にわたる調査が検討された。しかし樹木伐採の都合もあり、その可能な4,000㎡については第Ⅱ次調査を実施し、残りの範囲については伐採後に調査を実施する（第Ⅲ次調査）こととなった。

第Ⅱ次調査は担当者に佐藤克巳氏をお願いし、昭和56年7～8月にかけて実施した。調査の結果、弥生時代後期久ヶ原期の竪穴住居址5軒を検出し、遺物からみると久ヶ原式土器を主体とするものの、所謂「印旛・手賀沼系土器」も出土しており、地域的な特性を示していた。

この調査結果をうけて、第Ⅲ次調査は先行して確認調査を実施することとなった。これは残存調査範囲の広さと、遺構等が減少傾向を示していたため、調査域の主体を把握することを目的としたものであった。確認調査は藤原均を担当者として、昭和57年6～7月に行われ、竪穴住居址・土壙等を確認することができた。これをもとに再度協議が重ねられ、本調査を実施することとなった。

第Ⅲ次調査は確認調査に継続して藤原均が実施することとなり、昭和58年1～6月にかけて行われた。そして次に報告する調査成果を得ることができ、八千代市の原始・古代を解明する手懸りがまたひとつ加えられたと言えよう。

註1 佐藤克巳「阿蘇中学校東側遺跡」1981年 八千代市遺跡調査会

## Ⅱ 調査経過

- 昭和57年6～7月 確認調査を実施。住居址・土壙を検出。
- 昭和58年1月24日 本調査を開始。遺構平面プランの確認作業を行う。
- 昭和58年2月22日 S I - 1 (第15号住居址) の調査を開始(～28日に終了)。
- 昭和58年3月1日 S I - 2 (第16号住居址) の調査を開始(～8日に終了)。
- 昭和58年3月7日 S K - 1 (第5号土壙) の調査を開始(～16日に終了)。
- 昭和58年3月10日 S I - 3 (第17号住居址) の調査を開始(～16日に終了)。
- 昭和58年3月12日 第2号方形周溝墓の調査を開始(～17日に終了)。
- 昭和58年3月16日 S I - 4、5 (第18、19号住居址) の調査を開始。21日にS I - 4を、28日にS I - 5の調査を終了する。
- 昭和58年3月24日 S I - 6 (第20号住居址) の調査を開始。(～31日に終了)。
- 昭和58年3月25日 S I - 7 (第21号住居址) の調査を開始(～31日に終了)。
- 昭和58年3月28日 S I - 9、10 (第23、24号住居址) の調査をはじめ。S I - 9は31日、S I - 10は4月8日に終了する。
- 昭和58年4月11日 S K - 2、8 (第6、13号土壙) の調査をはじめ、ともに21日に終了する。
- 昭和58年4月16日 S K - 9、10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20 (第14～25号土壙) の調査を開始し、26日に終了する。
- 昭和58年4月17日 S K - 21、22、23、24、25、26、27 (第26～32号土壙) の調査を開始し、27日までに終了する。
- 昭和58年4月18日 S K - 30、31、32、33、34、35 (第35～40号土壙) の調査を開始する。いずれも20日までに終了。
- 昭和58年4月27日 炉址1、2、3の調査を開始し、5月7日に終了する。
- 昭和58年5月9日 補足調査を開始(～16日に終了)。
- 昭和58年5月17日 土層把握のため、トレンチを2本設定し、調査(～28日終了)。
- 昭和58年5月18日 全測を開始(～19日に終了)。
- 昭和58年6月6日 全景写真の撮影などを行い、現地作業を終了する。
- 昭和58年6～7月 整理作業を行う。
- 昭和58年8～10月 報告書作成。

### Ⅲ 位置と環境

阿蘇中学校東側遺跡は千葉県八千代市米本（よなもと）字山谷2724番地外に所在し、市立阿蘇中学校の北東約200mに位置する。本遺跡は「千葉県記念物所在地図（註1）」に記載されており、第Ⅰ次調査の報告書（註2）も刊行されているため、名称はそれによることとした。

八千代市は下総台地の西部に位置し、水田面で5～12m、台地上で14～28mと標高差の少ない地域である。そして市中央部を南北に縦断する印旛沼疎水として開析された新川と、それに注ぐ桑納（かんのう）川とによって、大きく3つの台地に区分される地形である。これら台地も複雑に入り込む樹枝状の谷津によって形づくられ、水系はいずれも印旛沼へ流入するものである。

このような地理的条件のもとに、該地は佐倉市との市境を流れる井野川が南下し、下高野（しもこうや）において西へ入り込む谷津が、その奥まって更に南へ分岐する谷津にとり囲まれた台地上平坦部に立地する。この台地は広く、調査対象地は東側縁辺に位置し、標高20～25mで、水田面との比高は6mである。

ところで本遺跡の周辺であるが、八千代市では現在264ヶ所の遺跡が確認され（註3）、先土器時代から中・近世に至る迄の長い期間に営まれたが、本遺跡周辺も市内での遺跡分布の濃い地区のひとつである。表面観察等における遺物散布に濃淡はあるものの、数多くの遺跡が確認される。

先土器時代については大山遺跡（9、諸磯、黒浜、堀之内、加曾利B式、印旛・手賀沼系）でフレイクが表採されているが、未だこの地区では不明な点が多い。縄文時代としては赤作遺跡（3、浮島、加曾利B式）、米本辺田台遺跡（6、加曾利E式）、大山遺跡、鳥ヶ谷遺跡（10、茅山、加曾利E・B式）、神野芝山遺跡（13、加曾利E・B式、安行Ⅰ・Ⅱ式）等の包蔵地と、神野（かの）貝塚（12、阿玉台～安行Ⅰ・Ⅱ式）が知られる。しかし該期についても遺構検出などが不十分で、不明な点が残されている。

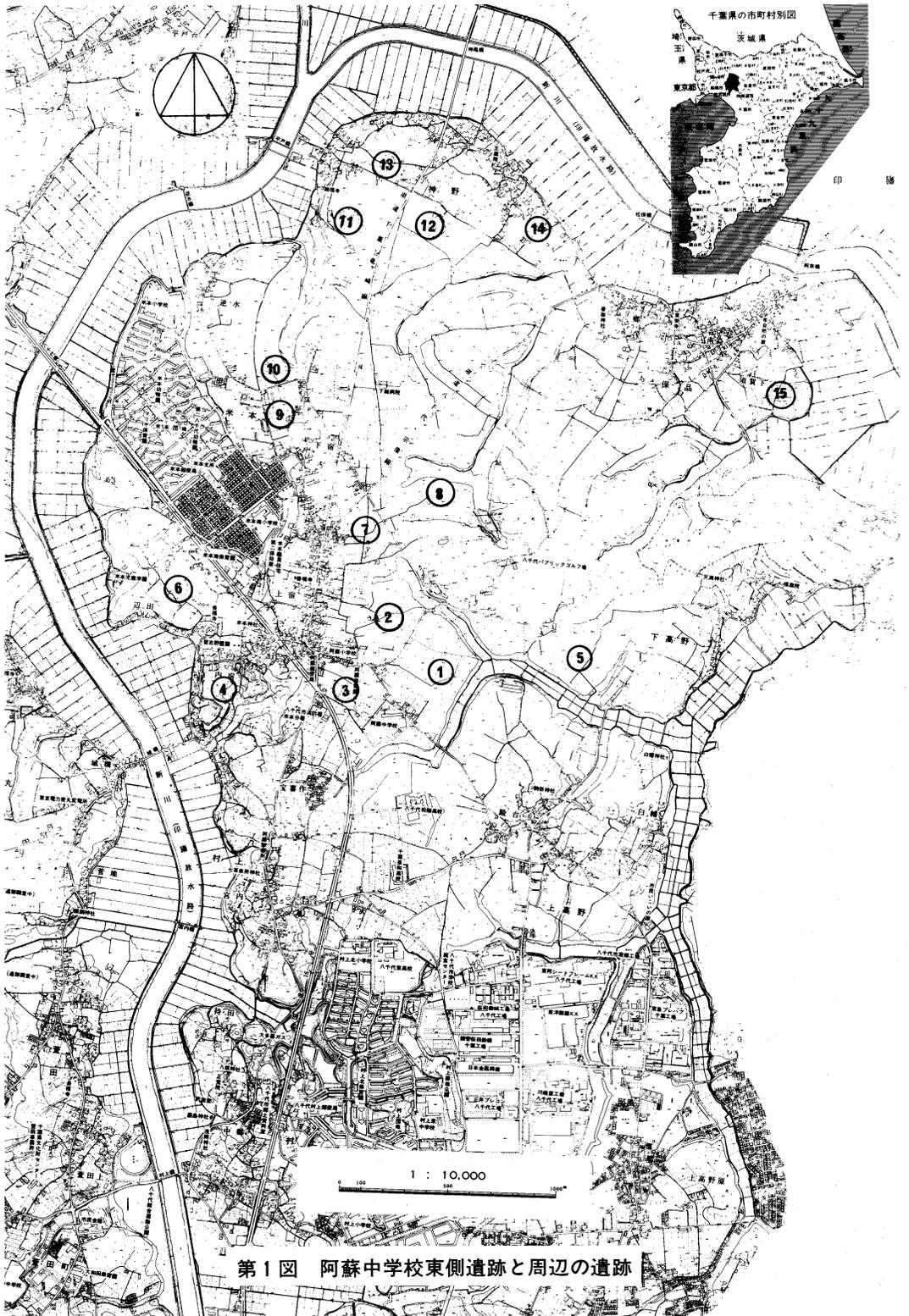
弥生時代としては神野芝山遺跡、おおべた遺跡（15、久ヶ原、印旛・手賀沼系）、平戸口遺跡（11）、鳥ヶ谷遺跡、大山遺跡等が知られるが、印旛・手賀沼系文化圏とされる一端を示す遺物の検出も類例を増加させている。

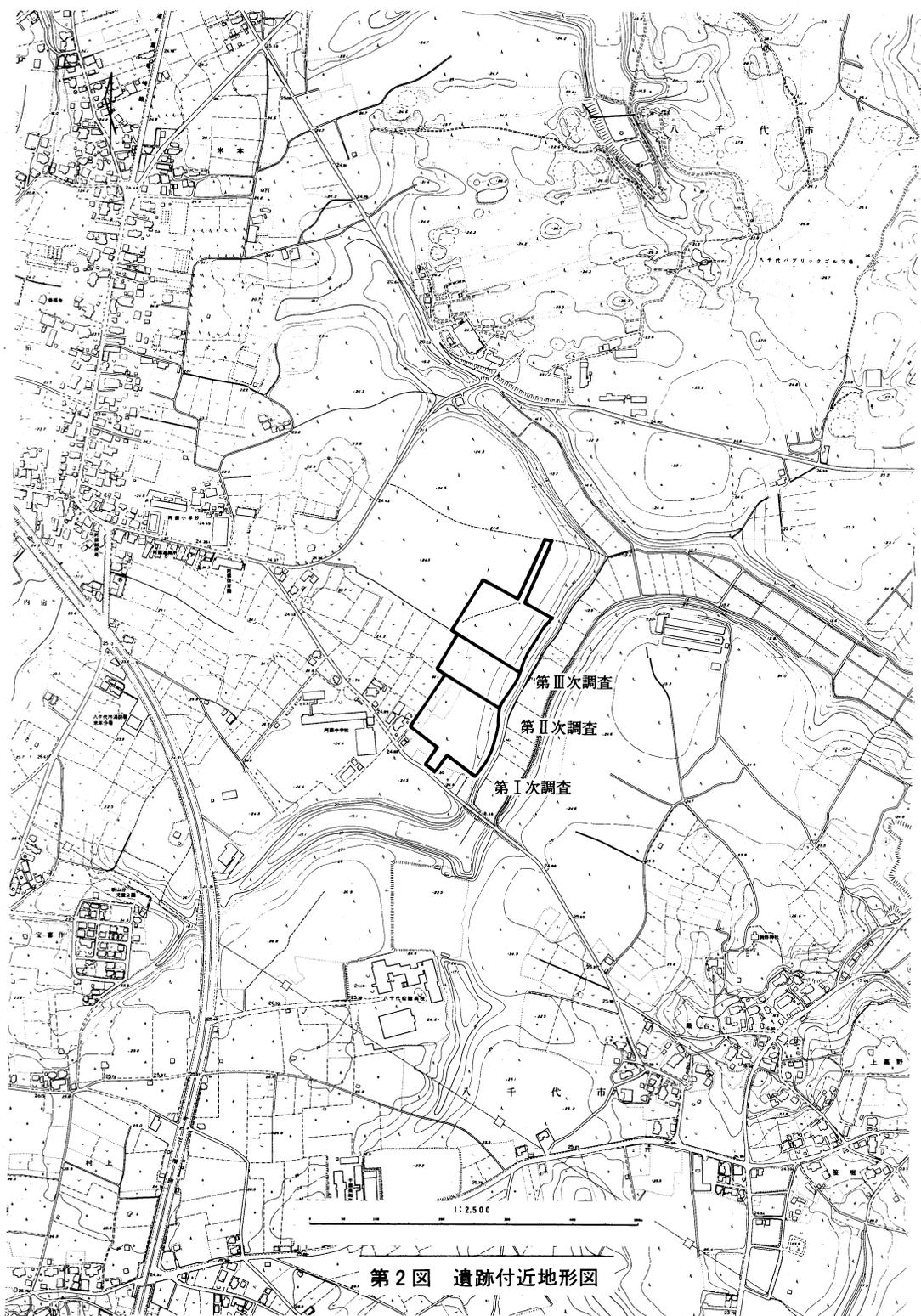
古墳時代から奈良・平安時代にかけては、遺物の多寡はあるものの殆んどの遺跡で出土する。中世以降は城館跡・塚へとその主体を移し、米本城跡（4）が知られる。塚は八千代市の遺跡の特徴となっている。

註1 千葉県教育委員会「千葉県記念物所在地図」1970年

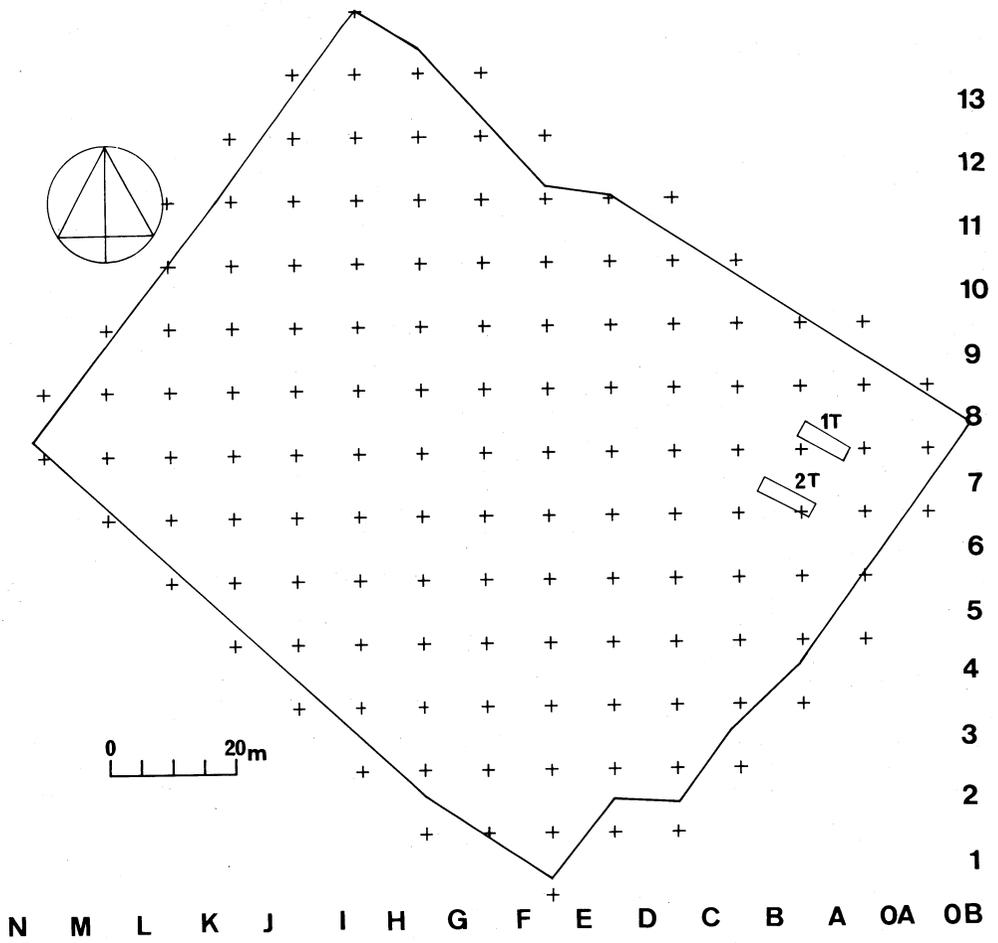
註2 八千代市遺跡調査会「阿蘇中学校東側遺跡」1981年（佐藤克巳編）

註3 八千代市教育委員会「八千代市の遺跡」1983年





第2図 遺跡付近地形図



第3図 調査区設定図

## Ⅳ 調査の概要

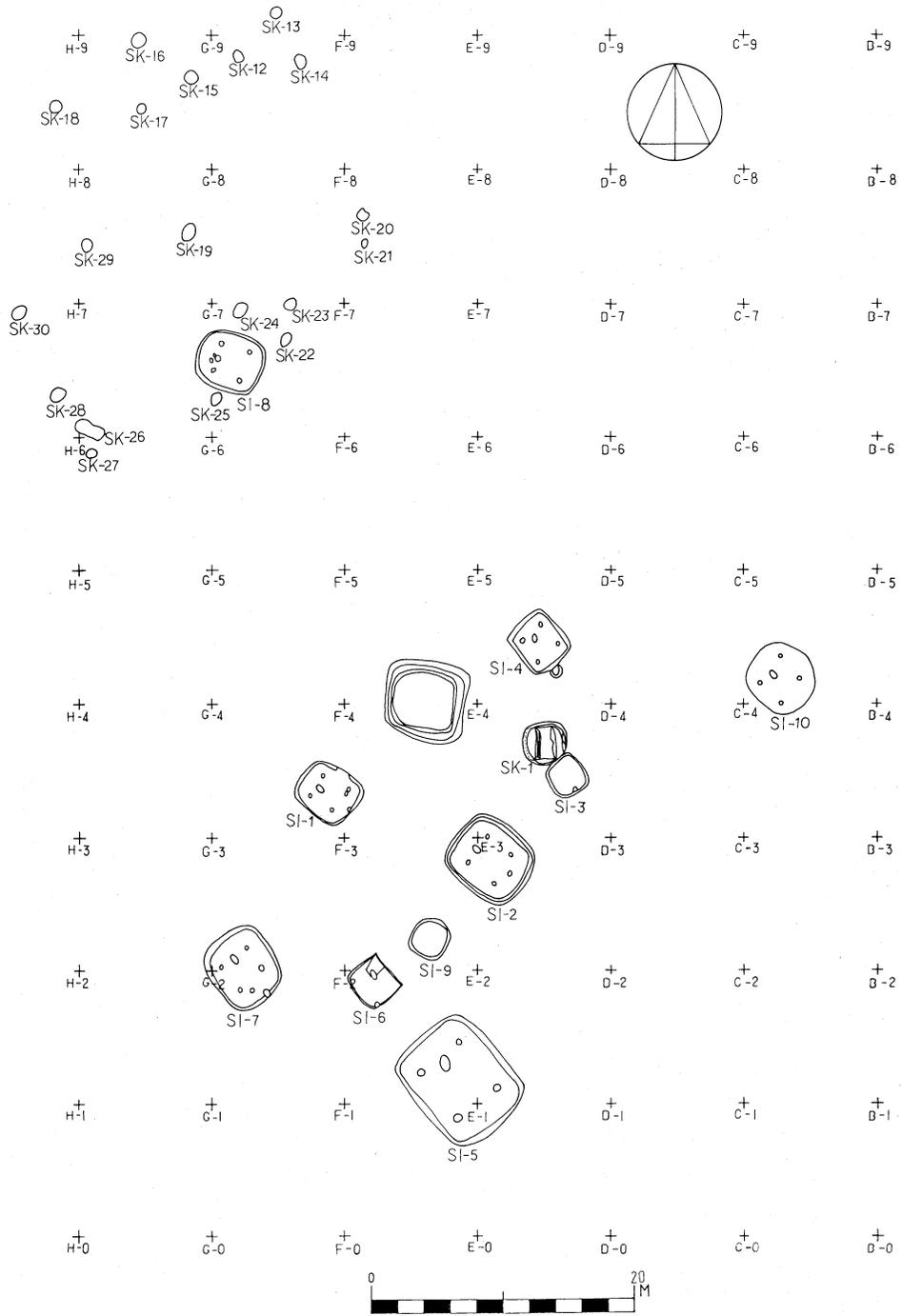
今回の調査では、住居址10軒、土壇35基、方形周溝墓1基、炉址3基、埋甕1点の49遺構が検出された。これらは第4・5図に示したとおりである。

住居址は調査区の南東部に集中しており、S I - 8のみが調査区のほぼ中央G 7グリッドで検出された。規模は大型と小型に分かれ、隅丸長方形・方形・小判形などの形状をなしている。大型の住居址はS I - 5を、小型のものはS I - 1を例とする。隅丸長方形の住居址はS I - 5、方形はS I - 6、小判形はS I - 4を例とする。住居址は柱穴・炉址を伴ない、柱穴は対角線上に4本配置するのを基準としているが、S I - 3、9については炉址と柱穴は検出されなかった。

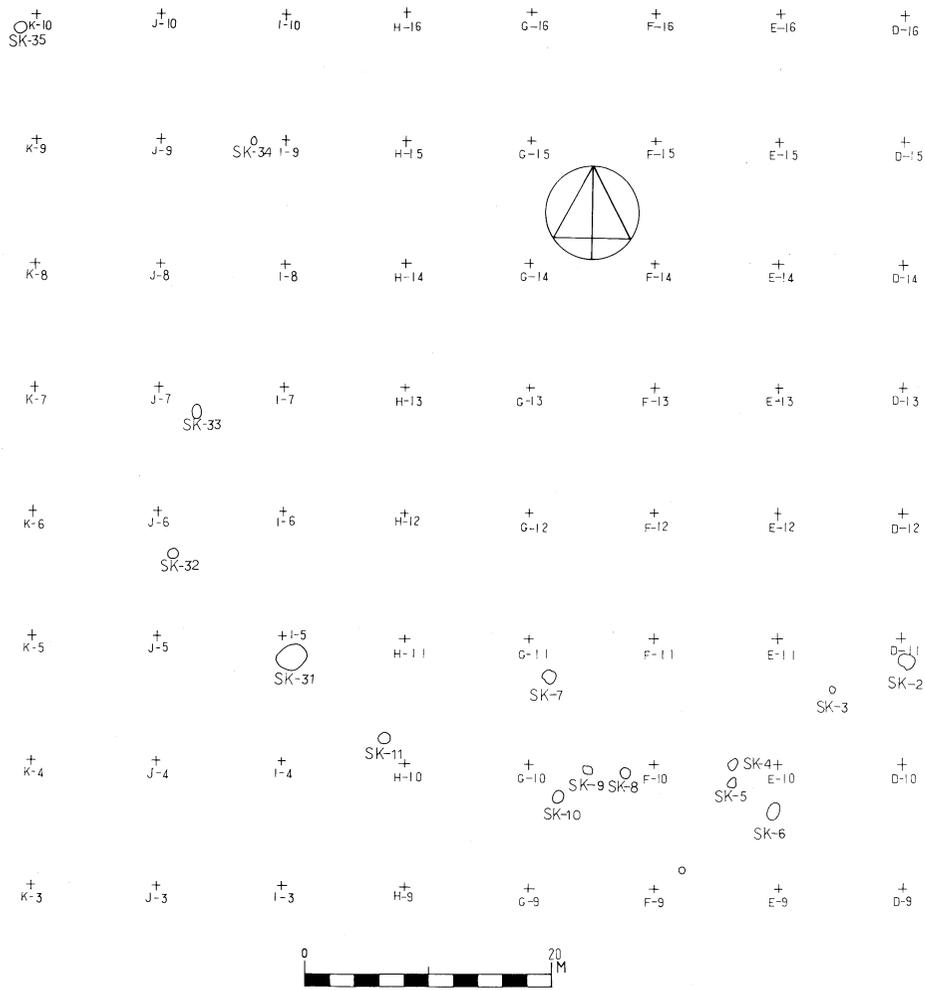
土壇はE 4グリッドでS I - 3に接して検出された、地下式で一部フラスコ状をなすS K - 1と、L 10グリッドで検出された覆土内に多量の焼土を含むS K - 35が注目される。しかし他の土壇については、なお不明な点が多い。

炉址及び埋甕はその周囲より関連した遺構が確認されず、単独のものとして扱った。埋甕は調査区北側のF 10グリッドの検出である。

出土遺物は住居址より弥生時代後期の甕・壺・鉢を主体とするが、S K - 1より須恵器壺が出土した。埋甕は加曾利E式に比定され、調査区南西部よりは遺構に伴わず260片の縄文式土器が出土した。なおS I - 8では、壺・甕がセットで出土した。



第4図 遺構配置図(1)



第 5 図 遺構配置図 ( 2 )

## V 遺構及び遺物

### 1 住居址

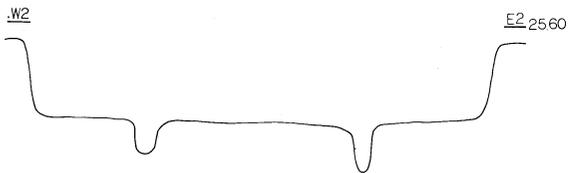
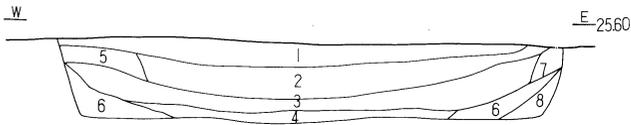
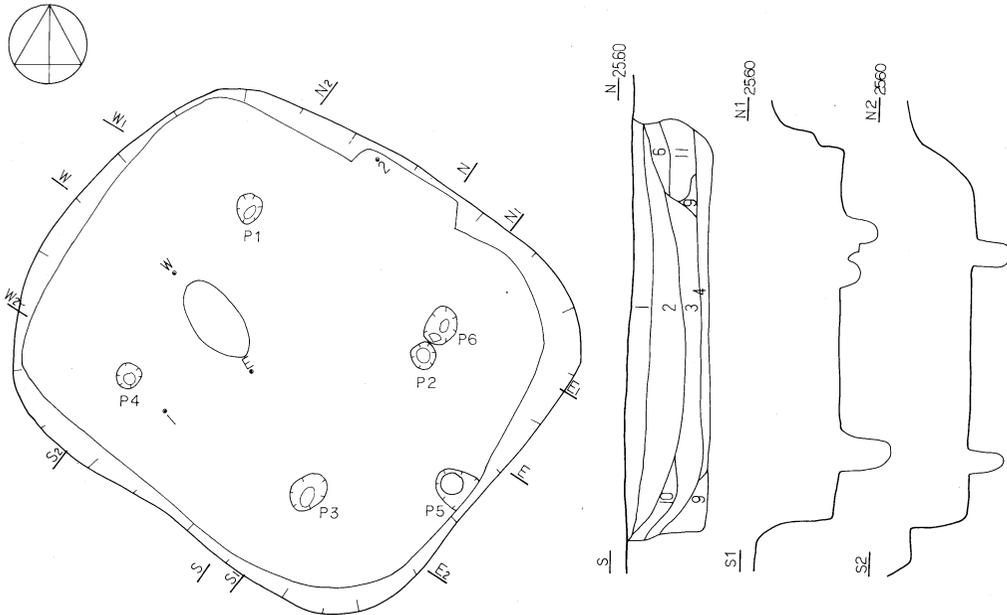
#### (1) S1-1 (第15号住居址：第6図，PL-1)

本址は、東西4.58m、南北3.90m、壁高0.72mあり、主軸はN-55°-Wで長方形形状を呈する。床は、柱穴の内側はしっかりした貼床となっているが、柱穴から壁にかけては比較的柔質となっている。壁は、北壁以外はほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴は、対角線上に4本(P1~P4)と、P2の北東部(P6)及び南壁中央部(P5)の合計6本確認された。

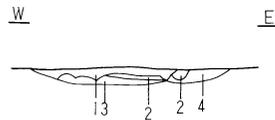
炉址は、住居中央北側で、P1~P2間の中央部に位置し、東西径0.85m、南北径0.43m、深さ0.08mあり、楕円形をなしている。焼土の上層に黒色土が堆積しており、焼土下のロームは良く分解している。方位は、住居址の主軸より15°東を向き、N-40°-Wである。

覆土は、黒色土・黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土の4層を基準とし、黒色土が2層、黒褐色土が6層、暗褐色土が2層と黄褐色土が1層の11層に細分され、レンズ状に堆積している。

遺物は、覆土内より10片の弥生式土器片のみであり、床面よりは出土しなかった。1(第8図)以外は全て小破片である。これは、頸部片で胴部にかけて斜縄文が施文されている。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は黒褐色で、一部煤が付着している。これらは、住居址廃棄後の流入等による遺物である。以上のことにより、本址は弥生時代後期の住居址と推定される。



- 土層凡例
- 1 黒褐色土 (ローム粒子を含み柔質)
  - 2 黒色土 (ローム粒子を含み粘性があり柔質)
  - 3 黒褐色土 (多量ローム粒子を含み暗く粘性がありや固質)
  - 4 黒褐色土 (ローム粒子と黒色土を含み粘性があり固質)
  - 5 黒褐色土 (ローム粒子を少量含み1より暗く2より明るい。柔質、粘性有)
  - 6 暗褐色土 (ローム粒子と黒色土を含み、暗く粘性有し柔質)
  - 7 暗褐色土 (粘性を有し柔質)
  - 8 黄褐色土
  - 9 黒色土 (2より明るく柔質。ローム粒子を少量含む)
  - 10 黒褐色土 (ローム粒子を多量に含み暗く柔質、粘性有)
  - 11 黒褐色土 (少量のL.Bを含み柔質、粘性有)



炉址土層凡例

- 1 黒色土 (焼土小痕を含む)
- 2 焼土
- 3 黄褐色土 (ロームが火力により分解したもの)
- 4 黄褐色土 (ブロック状をなす)

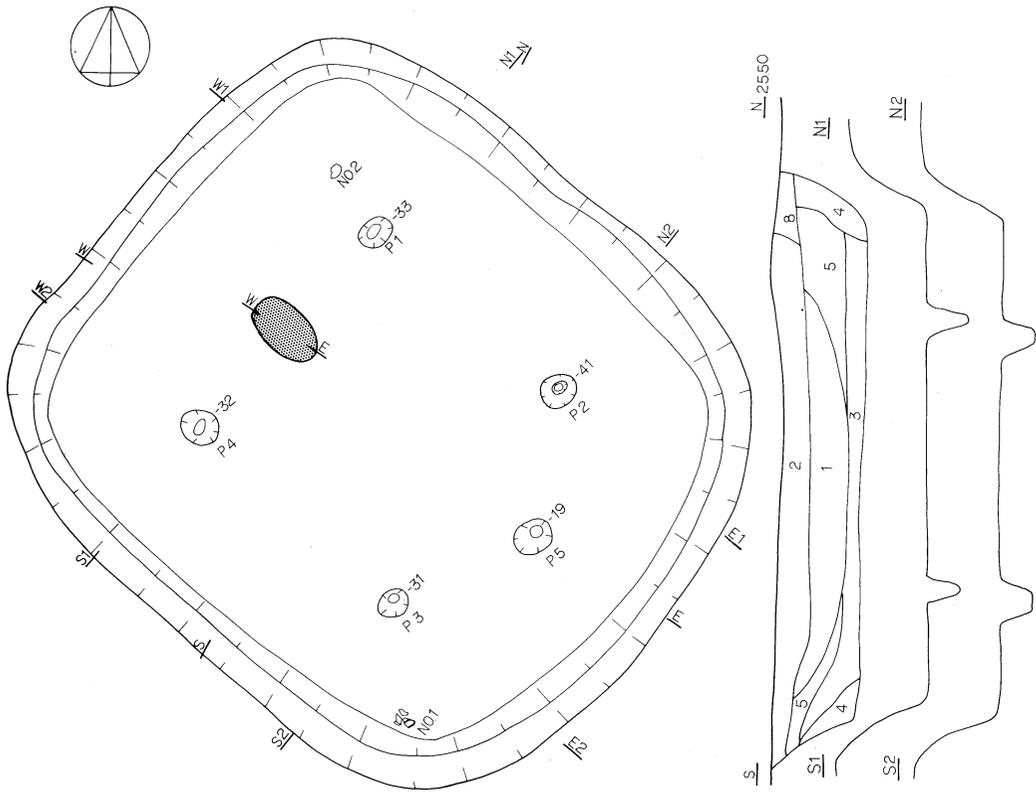
第6図 S I - 1 (第15号住居址) 遺構実測図

(2) S I - 2 (第16号住居址：第7図, PL-2)

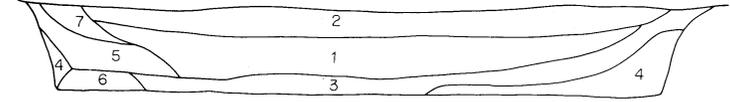
本址は、東西5.40m、南北6.25m、壁高0.77mあり、N-50°-Wに主軸を有し隅丸長方形状を呈する。床は、炉址の南東部はしっかりした貼床であるが、他の部分はやや柔質な床となっている。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、柱穴は、対角線上に4本と住居址の中心線上で南側に1本の合計5本を検出した。炉址は、住居中央線上よりやや北側で、P1～P4間の中央部に位置し、東西0.42m、南北0.70m、深さ0.12mあり、楕円形を呈する。方位は、住居址の主軸より8°東向きのN-42°-Wにある。覆土は、黒色土・焼土・黄褐色土であるが、焼土下の黄褐色土(ローム)はよく分解しているが、一部木根による攪乱がある。

覆土は、黒色土・黒褐色土・黄褐色土・暗褐色土の4層を基準とし、黒褐色土が4層、黄褐色土が2層に各々分類、計8層で、ほぼレンズ状に堆積している。遺物としては、覆土内より弥生式土器の小破片が数点、床面よりは南東コーナーより口縁部片(1, 第8図)が検出された。2は自然石のようである。1の口縁部は、複合口縁であり、口縁下部に刻目痕が施文されている。又口唇部には、羽状縄文が施文されている。胴部にかけては、朱彩されている。胎土は緻密で、焼成は良好、色調は赤褐色を呈している。

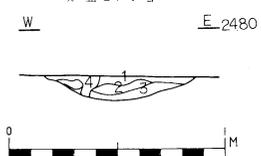
1が弥生時代後期の土器片と推定されることから、本址も同時期の住居址と推定される。



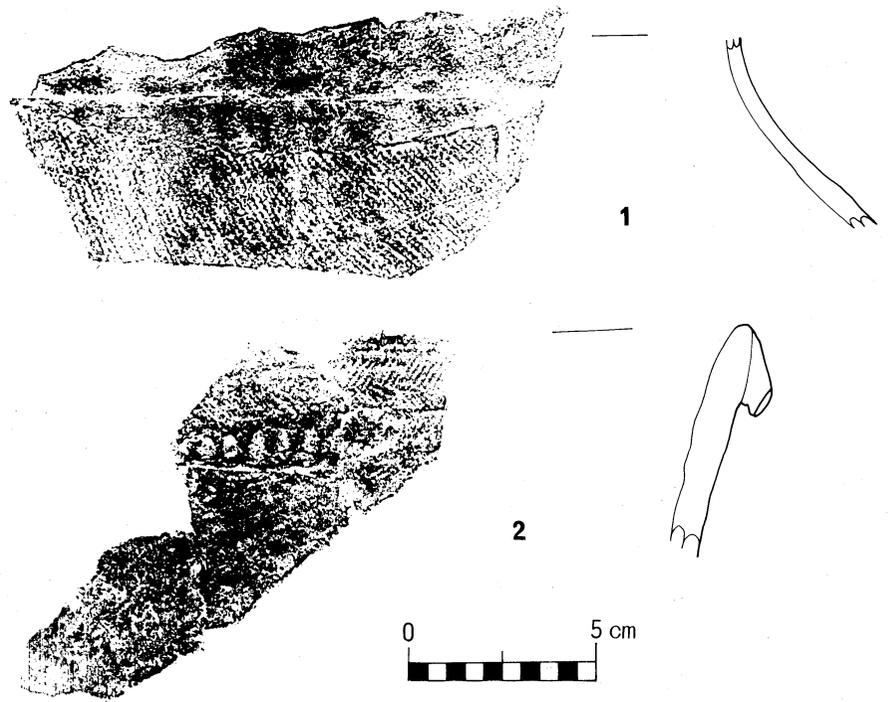
W E 2550



- 土層凡例
- 1 黒色土 (J-1層でやや分解している)
  - 2 黒褐色土 (2-1層で、一部擾乱されている)
  - 3 黒褐色土 (2-3層で固質)
  - 4 黄褐色土 (ロームが分解したもの)
  - 5 黒褐色土 (2-4層)
  - 6 黄褐色土 (ローム粒子と黒色土を含む粘性を有し柔質)
  - 7 黒褐色土 (2-5層)
  - 8 暗褐色土 (3層で擾乱層)
- 炉址セクション



第7図 SI-2 (第16号住居址) 遺構実測図



第8图 SI-1·2 (第15号、第16号住居址) 出土遺物実測図

(3) S I - 3 (第17号住居址：第9図，PL-3)

本址は、東西2.80m、南北3.00m、壁高0.42mあり、N-37°Wに方位を有し、胴張りで隅丸方形状を呈する。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、床はしっかりしており、貼床ではない。柱穴は、南壁中央部で1本(床-0.11m)検出されたのみであり、他の部分からは検出されておらず、炉址も確認されなかった。

覆土は、黒色土・黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土の4層がレンズ状に堆積している。

遺物は殆んど包含していないが、東壁中央南側の覆土内最上層の壁掘り込み面から底部片が出土したのみである。これは縄文中期の土器で、磨滅が著しいため復原は出来なかった。よって、本址の正確な時期は不明であるが、弥生時代後期の可能性がある。

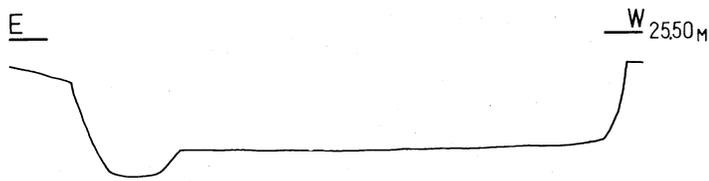
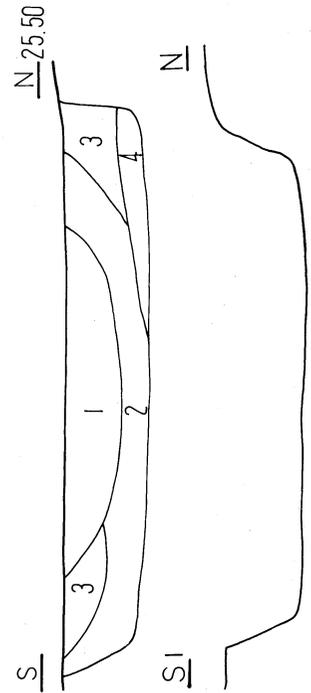
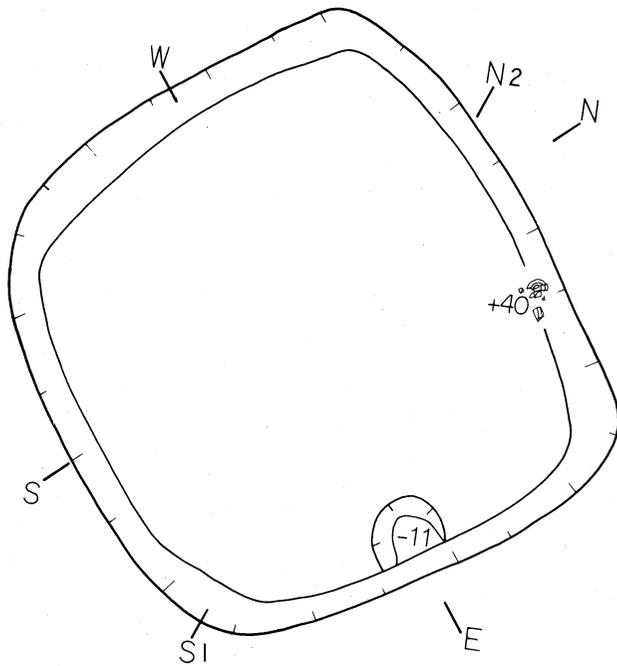
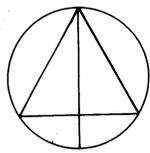
(4) S I - 4 (第18号住居址：第10図，PL-4)

本址は、東西3.87m、南北4.30m、壁高0.72mあり、N-41°Wに主軸を有し、4壁ともやや胴張りの長方形状であるが、いわゆる小判形をなす。床は、しっかりした貼床であり、壁は斜めに掘り込まれている。柱穴は、対角線上に4本確認された。炉址は、住居中央北側で検出し、東西0.45m、南北0.67m、深さ0.13mあり、楕円形をなす。方位は、住居址の主軸より12東向きのN-29°Wである。炉址内には、黒色土が堆積しており、焼土下のロームは良く分解している。

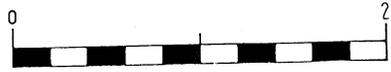
覆土は、黒色土・黒褐色土・黄褐色土の3層を基準とするが、黒褐色土が2層に、黄褐色土が3層に、計6層がレンズ状に堆積している。

遺物としては、覆土内より弥生式土器の小破片と、甕型土器頸部片(2)、第3層中より自然石片が出土した程度であり、総数も約10片と少ない。1は床面上11.0cm、2は床面上18.0cmで共に第3層中からの出土であり、住居址廃棄後の流入等によると判断されるが、住居址と遺物とは、ほぼ同時になると推定される。

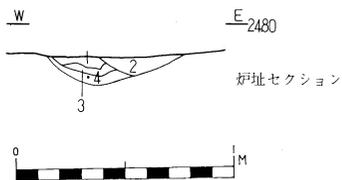
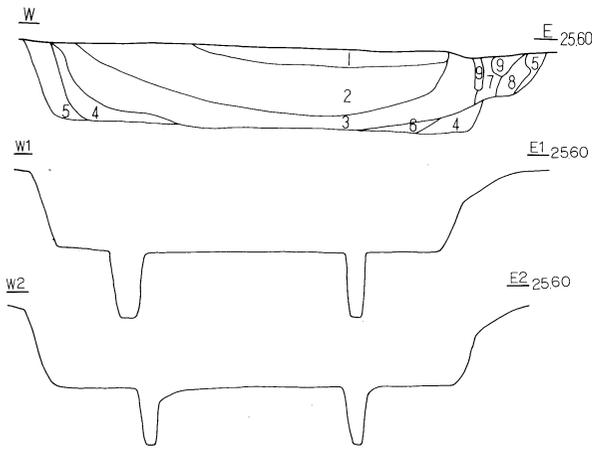
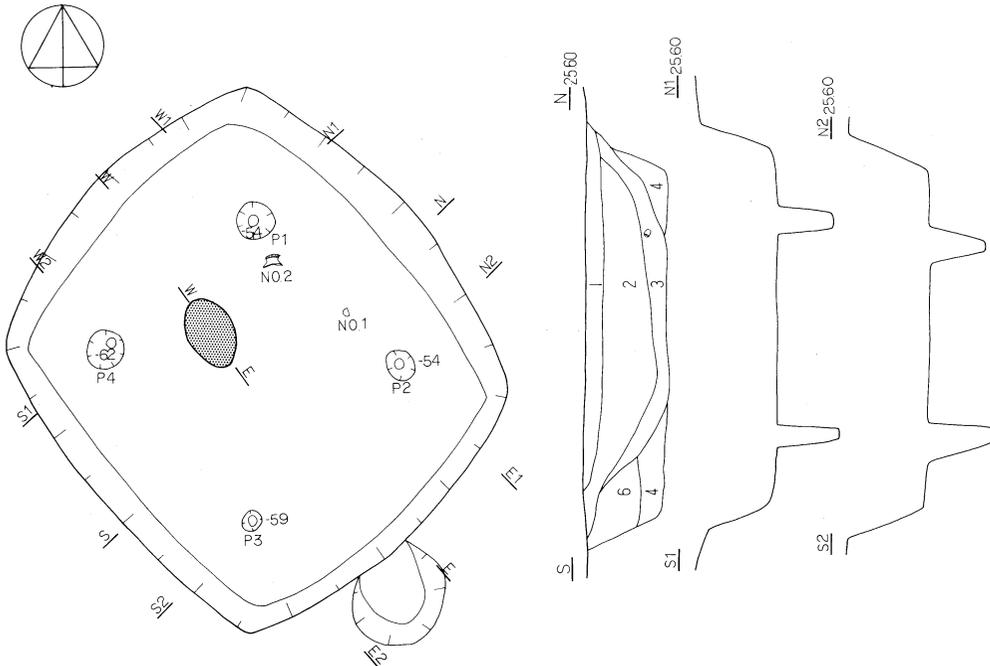
1(第11図)は、頸部片で床面上11.0cmの層位から横位で出土している。口縁部と胴部以下は欠損するが、現高10.0cm、頸部径8.2cmを有する。頸部には、羽状縄文が施された後スタンプ状の貼付が2点1組で4ヶ所に貼付けられている。胴部以下は、縦位のヘラナデ整形が施され、内面は朱彩である。胎土は粗く、焼成は良好で、色調は暗褐色を呈するが、一部赤褐色であり朱彩の痕跡が認められる。内面は、磨滅が著しくなっている。2~4までは、覆土内からの出土であり同一個体と推定される。共に斜縄文が施されており、胎土は緻密で、焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。1は、南関東系、2~4は印旛・手賀沼系と比定される。よって、本址は弥生時代後期と推定される。なお、本址の南壁には、東西0.92m、南北0.80m、深さ0.35mあり、円形を呈する遺構があるが、本址とは結び付かないようであり、その性格は不明である。遺構内には、黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土が堆積している。この周囲に同様の遺構は確認されなかった。



- 土層凡例
- 1 黒色土 (ローム粒子を少量含み粘性がありやや固質)
  - 2 黒褐色土 (ローム粒子を含み粘性があり固質)
  - 3 暗褐色土 (ローム粒子を含み粘性があり固質)
  - 4 黄褐色土 (柔質)



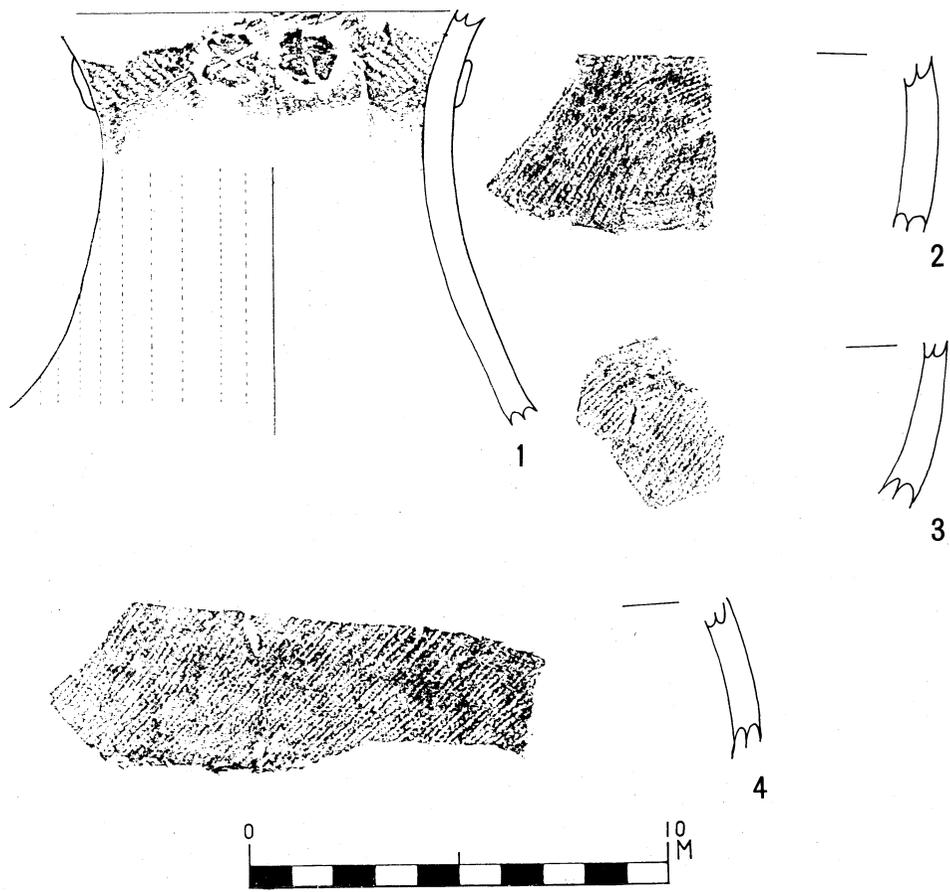
第9図 SI-3 (第17号住居址) 遺構実測図



- 土層凡例
- 1 黒褐色土 (ローム粒子を少量含み、粘性を有し柔質)
  - 2 黒色土 (ローム粒子を含み、粘性が有し柔質)
  - 3 黒褐色土 (多量のローム粒子を含み、1より明るく粘性がなくサラサラしている)
  - 4 黄褐色土 (褐色土を含み、粘性を有し柔質)
  - 5 黄褐色土
  - 6 黄褐色土 (黒色土とローム小痕を含み、暗く柔質)
  - 7 黒褐色土 (ローム粒子を含み、柔質)
  - 8 暗褐色土 (やや攪乱を受けている。ローム粒子を含む)
  - 9 攪乱

- 炉址土層凡例
- 1 黒色土 (焼土粒を含む)
  - 2 黒褐色土 (焼土粒を含む)
  - 3 焼土
  - 4 黄褐色土

第10図 S I - 4 (第18号住居址) 遺構実測図



第11图 SI-4 (第18号住居址) 出土遺物実測図

(5) S1-5 (第19号住居址：第12図、PL-5)

本址は、東西7.12m、南北8.80m、壁高0.90mあり、長軸はN-39°Wを示し、やや胴張で隅丸長方形を呈する。床は、全体的にしっかりした張床で、壁は斜めに掘り込まれている。柱穴は、対角線上に4本掘り込まれている。炉址は、住居址の中央北側でP1～P4間に位置しており、住居址と同様N-39°Wにその主軸を有している。大きさは東西0.75m、南北1.26m、深さ0.13mあり、楕円形を呈しているが、北側と南側は攪乱のため失われている。炉址内には、焼土の上面に黒色土が堆積しており、焼土下のロームは良く分解している。

覆土は2ヶ所攪乱を受けているが、黒色土・黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土を基準とする。黒褐色土が3層に、暗褐色土が2層に各々分かれるため7層となり、レンズ状に堆積している。

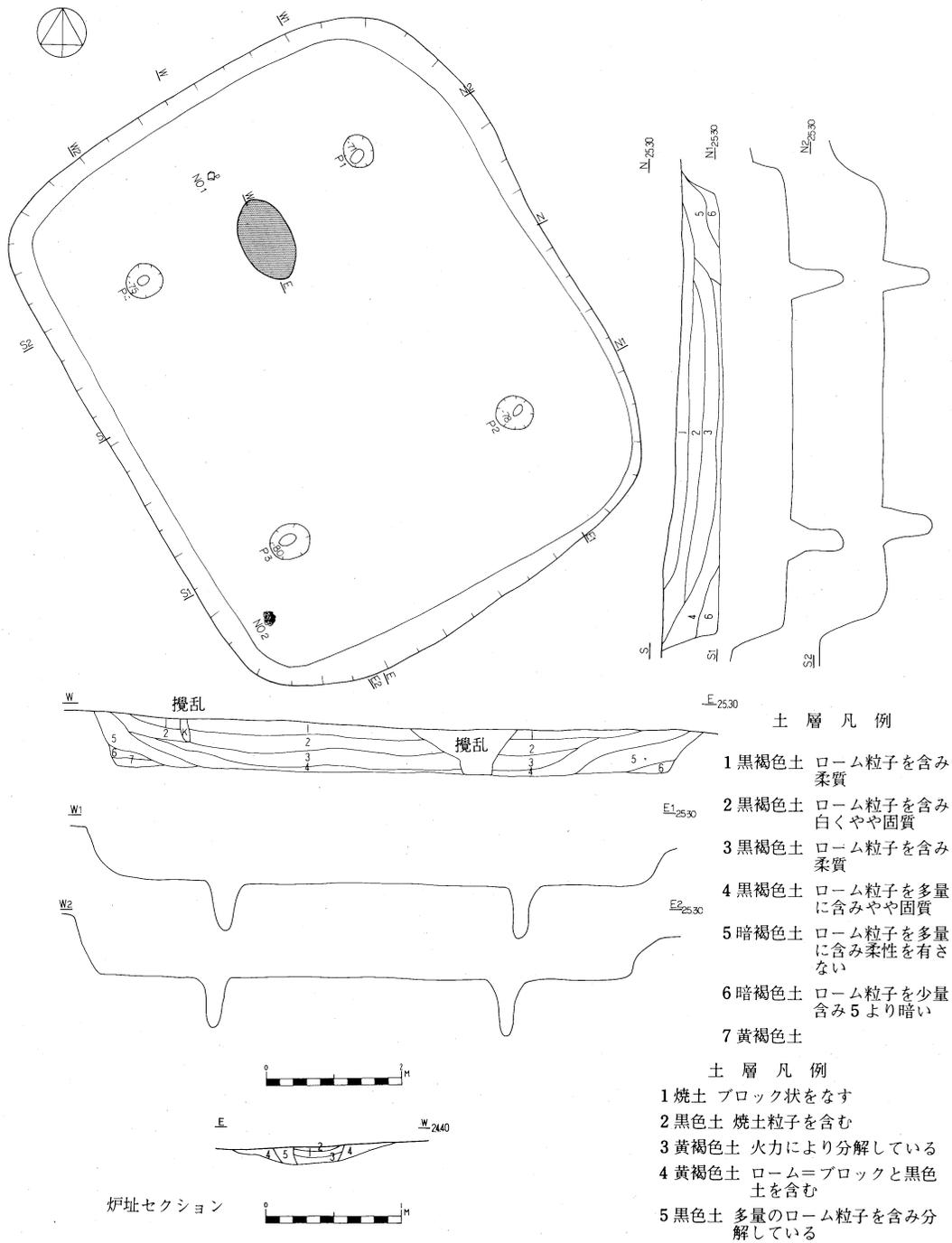
遺物は覆土内から弥生式土器の小破片が、数点出土したが、床面よりは検出されなかった。1は、第6層出土で、口縁部と底部を欠く胴部片である。胴上部に低い隆帯を有し、隆帯下部には刻目が押圧されている。隆帯の上・下には合計5本の横位S字状結節文が施されており、胴部には斜縄文が施されている。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は暗褐色を呈している。2は、第5層中での出土で、口縁部片である。口唇部には、押圧がされており、口縁部に低い二段の隆帯があり、頸部下位にはS字状結節文が施され、この下位に斜縄文が施される。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は黒色で一部煤が付着している。1は南関東系であろうし、2は北関東系の弥生式土器と推定される。以上より、本址は弥生時代後期の住居址と推定される。

(6) S1-6 (第20号住居址：第14図、PL-6)

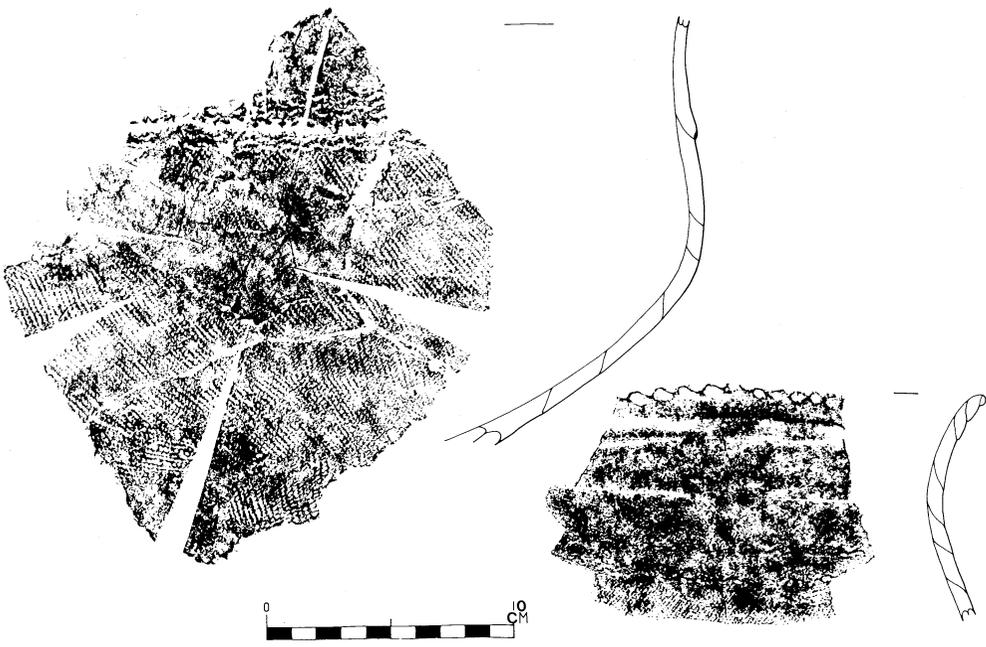
本址は、東西3.12m、南北3.53m、壁高0.50mあり、主軸はN-42°Wで、やや胴張りの小判形である。床は、比較的しっかりした張床であり、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴は、対角線上に3本確認されたが、北東部の1本は攪乱の為消失している。この他に、南東部壁と北西コーナーに接したのも検出され、5本確認されたが、本来は6本掘り込まれていたことと推定される。炉址は、住居址の中心線よりそれ、北東部で確認されたが、大部分は攪乱を受けている。東西0.35m、南北0.60m(推定)、深さ0.25mあり、住居址の主軸より15°東向きのN-27°Wを向き、楕円形を呈していたと推定される。炉址内の焼土は、ロームが焼けたブロック状をなして焼土下のロームは良く分解しているが、焼土上層には黒色土が堆積している。

覆土は2ヶ所攪乱を受けているが、黒色土・黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土を基準とし、黒褐色土が2層に細分されるため、5層となり、レンズ状に堆積していた。

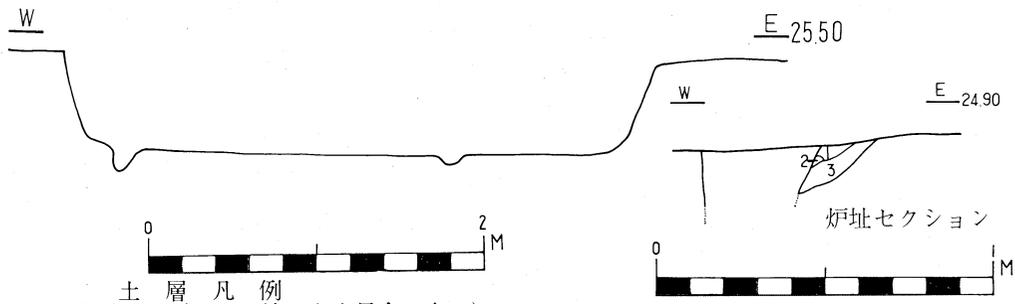
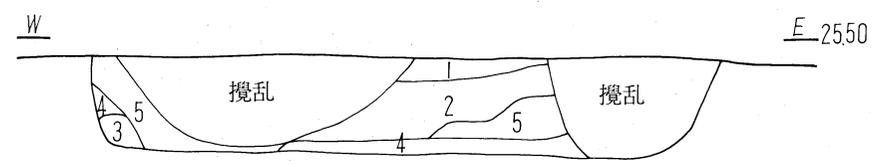
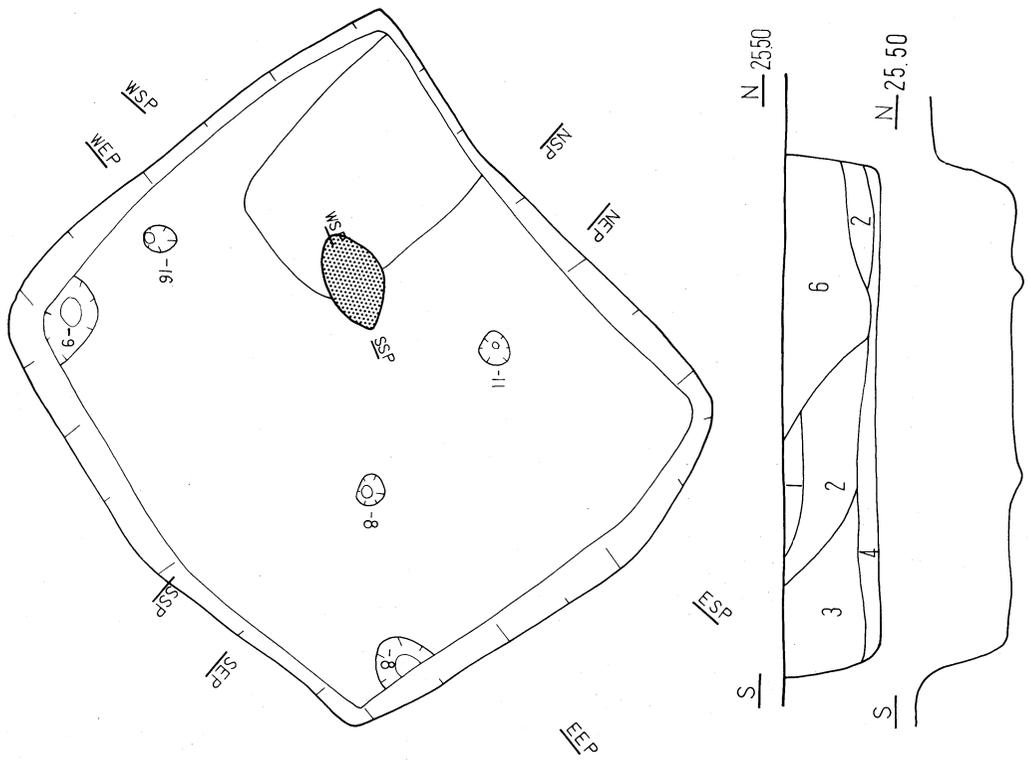
遺物としては、覆土内より弥生式土器の小破片が数点出土した。流入等によるものであるが弥生時代後期に比定されるため、本址も同時期の住居址と推定される。



第12図 S I - 5 (第19号住居址) 遺構実測図



第13图 S I - 5 (第19号住居址) 出土遗物实测图



- 土層凡例
- 1 黒褐色土 (ローム粒子を少量含み白い)
  - 2 黒色土 (焼土粒子を少量含む)
  - 3 暗褐色土 (ローム粒子を少量含む)
  - 4 黄褐色土 (多量のローム粒子を含む)
  - 5 黒褐色土 (多量のローム)

- 土層凡例
- 1 黒色土 (焼土粒子を含む)
  - 2 焼土 (ブロック状をなす)
  - 3 黄褐色土 (火力の為分解している)

第14図 S I - 6 (第20号住居址) 遺構実測図

(7) S1-7 (第21号住居址：第15図, PL-7)

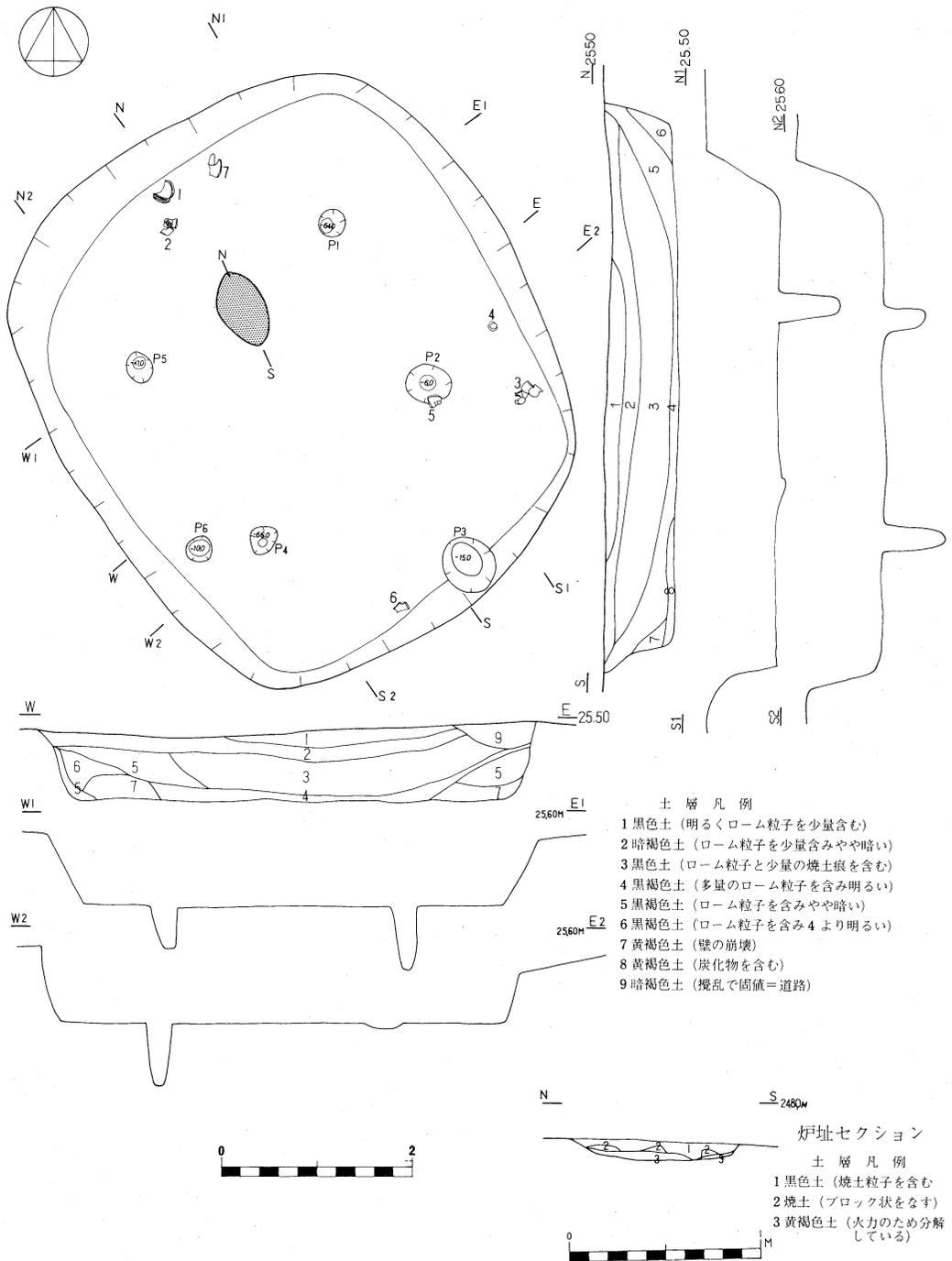
本址は、東西5.15m、南北5.90m、壁高0.75mをはかり、主軸をN-33°-Wで、隅丸長方形状を呈するやや胴張りの住居址である。床は、柱穴の内側はしっかりした貼床であるが、柱穴から壁にかけては比較的軟質である。柱穴は対角線上に4本(P1、2、4、5)と、南壁中央部(P3)及び西壁部(P6)に各1本の、6本が検出されたが、南壁の柱穴は大きさに対し浅くなっている。炉址は、住居址の中央北側でP1～P5間の中央部に位置しており、住居址の主軸より3°東向きにN-30°-Wに、東西0.50m、南北0.85m、深さ0.20mを測り、楕円形を呈している。焼土は、ブロック状(ロームが焼土化したもの)を呈しているが、焼土下のロームは良く分解している。焼土上層には、黒色土が堆積している。

覆土は、黒色土・黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土を基準とし、黒色土が2層に、黒褐色土が3層に、暗褐色土が2層、黄褐色土が2層に各々細分され、計9層がレンズ状に堆積している。

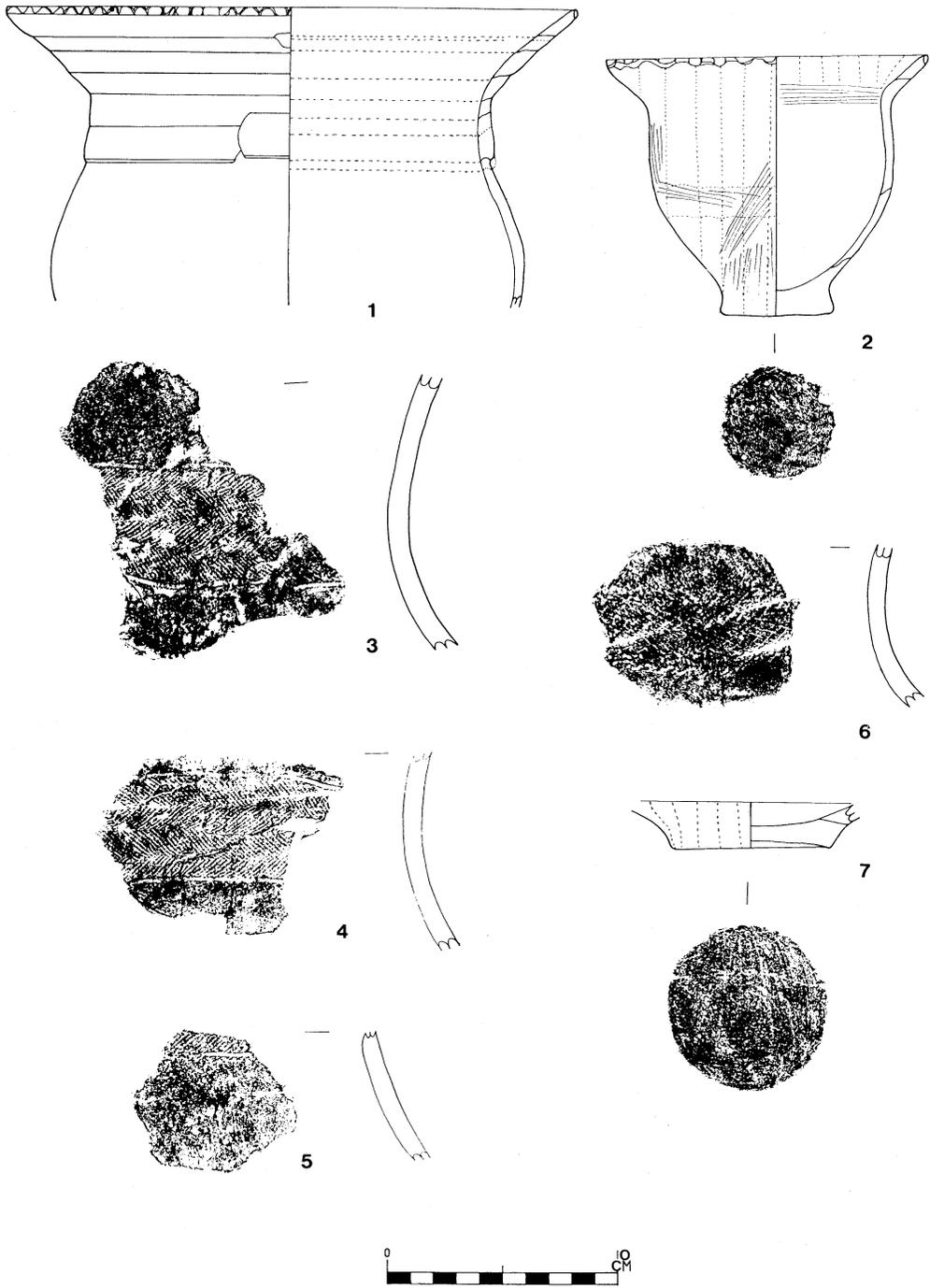
遺物は、覆土より弥生式土器の小破片が数点出土し、床面接着遺物としては、1の甕型土器、2の甕型土器頸部片、3の小型壺型土器があり、土器片では5と6が床着である。4と7は第4層と第7層中よりの出土であるが、覆土内検出物となる。

1(第16図1)は甕型土器で $\frac{1}{2}$ 程度の完存率である。推定口径24.5cm、現高12.8cmを計測する。口縁部は外傾し、胴部中位に最大径を有している。口唇部に波状押圧痕があり、頸部には6段の低い隆帯が配されている。胴部以下は無文帯のようである。(胎土は粗く、焼成は良好であり、色調は褐色を呈している。)2(第16図2)は小型壺型土器で胴部を一部欠損している。口径13.8cm、現高11.1cm、胴部径10.5cm、底部径4.8cmを計測する。口縁部は鈍く外傾しており、胴部下位に最大径を有し緩かに底部へと至っている。口唇部には押圧がなされ、胴部は無文帯である。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は黒褐色を呈している。整形は縦位→横位へのヘラナデである。3(第16図3)は壺型土器頸部片と推定される。頸部文様帯は、羽状縄文→沈線による上下区画の施順である。胎土は粗く、焼成は悪く、色調は暗褐色を呈するが、朱彩により赤褐色を呈する部分があり、内面は著しく磨滅している。4、5は同一個体である。6(第16図6)は、壺型土器頸部片と推定される。頸部文様帯は、S字状結節文により上下区画がなされ、区画内に格子目状燃糸文が施されている。胎土は粗く、焼成は良好で、色調は暗褐色を呈している。器面が、やや磨滅しており、他の土器片は無文帯である。7(第16図7)は底部片である。底径6.3cm×7.0cm、現高2.0cmである。底面は、内傾している。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は茶褐色を呈している。

以上より、本址は弥生時代後期の住居址と推定される。



第15図 S I-7 (第21号住居址) 遺構実測図



第16図 S I - 7 (第21号住居址) 出土遺物実測図

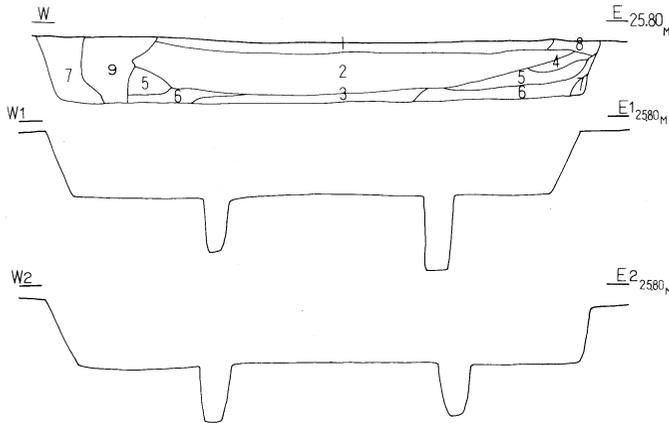
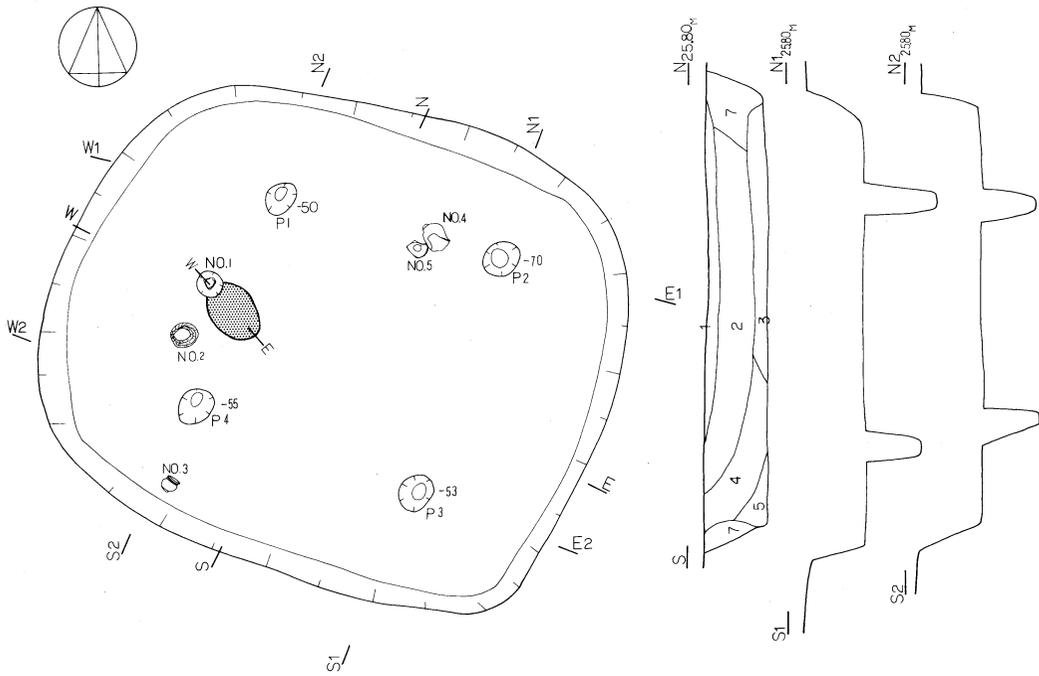
(8) S1-8 (第22号住居址：第17図， PL-8)

本址は、東西5.15m、南北4.39m、壁高0.60mあり、N-64°-Wに方位を有し、胴張の隅丸長方形をなす。床は、しっかりした貼床であり、壁は斜めに掘り込まれている。柱穴は、対角線上に4本確認された。炉址は、住居址の中央北側で、P1～P4間の中央部に位置し、住居址の主軸より34°東向きのN-30°-Wである。東西0.38m、南北0.55m、深さ0.07mあり、楕円形をなす。焼土は、ロームが焼土化したブロック状をなしており、焼土下のロームは良く分解している。焼土上面には、黒色土が堆積している。

覆土は一部攪乱を受けているが、黒色土・黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土を基準とし、黒色土が2層に、黒褐色土が4層に各々細分されるため、8層となり、ほぼレンズ状に堆積している。

遺物は、覆土内より数点、床面からは5点の弥生式土器が出土した。1は、壺型土器の胴部以下と推定され、炉址北側で検出された。胴部径22.0cm、現高11.5cmを有する。無文帯で、胴部は縦位のヘラナデであり、底部にかけては縦位のヘラナデである。胎土は緻密で、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。2は、1の南側に位置しており、口縁部と胴部以下を欠損している。法量は現高13.8cm、胴部径23.5cmを有する。頸部には、刻目を有する低い隆帯があり、隆帯と沈線との区画内に格子目状燃糸文が施されている。胴部は、無文帯であるが朱彩されている。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は赤褐色を呈している。3は、南壁付近で横位の状況で検出され、口縁部の一部を欠損しているがほぼ完形品である。口縁部は、小さく緩やかに外傾しており、胴部下位に最入径を有するが「く」字状に張出し、底部に至る。頸部に、3段の低い隆帯がある以外無文帯である。底部底面には木葉痕が残る。法量は、現高12.2cm、口径12.4cm、底径6.3cmを有している。4は、東壁付近で横位にて出土し、胴部を一部欠損している。口縁部は、緩やかに外傾しており、胴部下位に最大径を有する。頸部は、1～2段の隆帯（非常に低く、隆帯消失を示している）があり、胴部には2cm程度の間隔をおいて斜縄文が施されている。胎土は緻密で、焼成は普通、色調は黒褐色を呈しており、一部煤を付着している。法量は、器高22.3cm、胴部径19.2cm、底部径6.0×6.5cmである。6は覆土内からの検出である。推定口径は、24.0cmである。

これらの遺物は、弥生時代後期に比定され、このことより、本址も同時期とされる。



- 土層凡例
- 1 黒色土 (ローム粒子を含む)
  - 2 黒色土 (ローム粒子を含む)
  - 3 黒褐色土 (焼土粒子を含む)
  - 4 黒褐色土 (ローム粒子を含む)
  - 5 黒褐色土 (ローム粒子を含む④より明るい)
  - 6 黒褐色土 (多量のローム粒子を含む⑤より明るい)
  - 7 黄褐色土
  - 8 暗褐色土
  - 9 攪乱

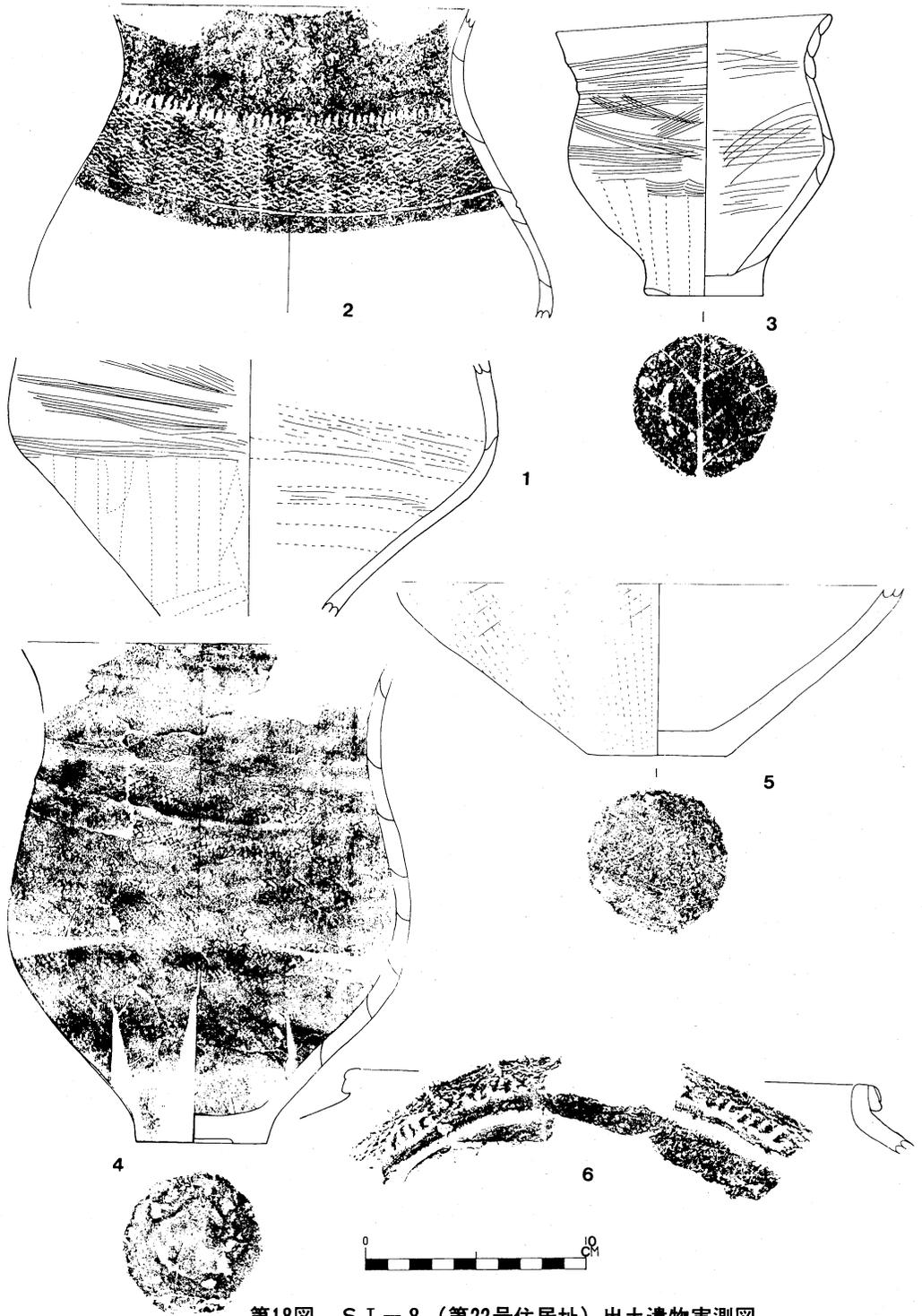


E W 25.20m



- 土層凡例
- 1 黒色土 (焼土粒子を含む)
  - 2 焼土
  - 3 黄褐色土
  - 4 攪乱

第17図 S I - 8 (第22号住居址) 遺構実測図



第18图 S I - 8 (第22号住居址) 出土遗物实测图

(9) S I - 9 (第23号住居址：第19図, P L - 6)

本址は、東西2.95m、南北3.00m、壁高0.25mをはかり、主軸はN-30°-Eを示し、隅丸方形状を呈する。床は、柔弱な貼床であり、壁は斜めに掘り込まれている。炉址と柱穴は、確認されなかった。

覆土は、黒色土・黒褐色土・黄褐色土を基準とし、黒褐色土が2層に分かれるため、4層となる。

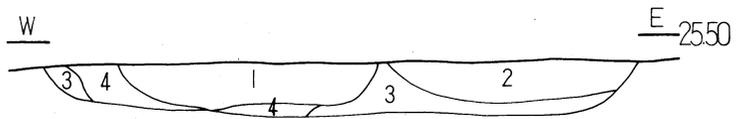
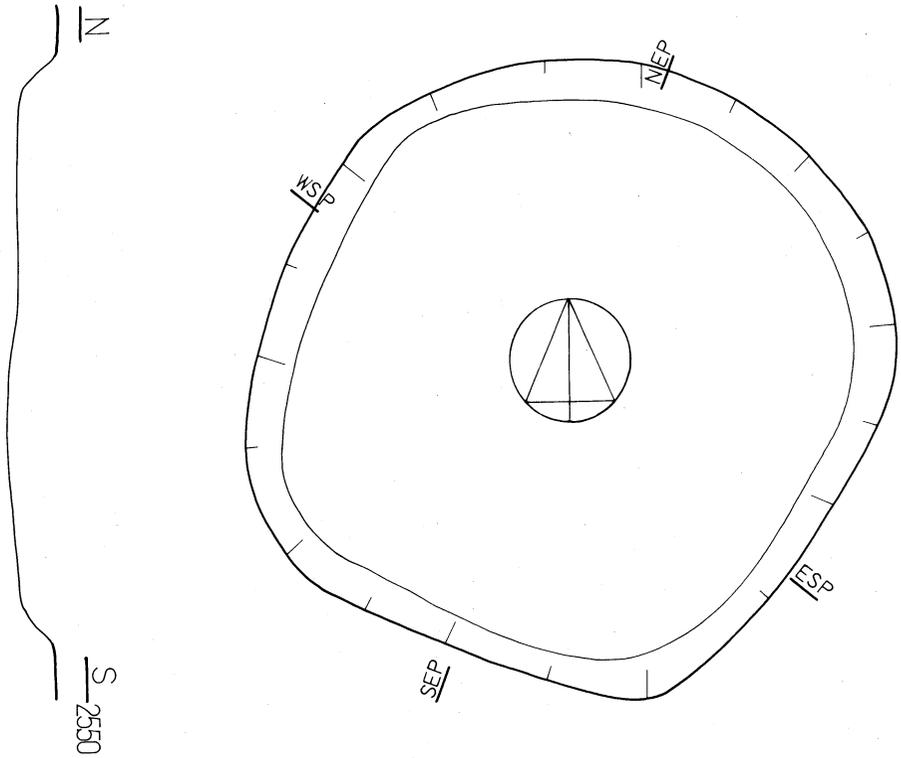
本址からは、炉址、柱穴、遺物は確認されておらず、住居址とするよりは小堅穴遺構とすべきかとも考えられる。が、本址の周囲に住居址が検出されているため、住居址として記述した。あるいは、「住居」としての遺構ではなく、「住居」以外の目的を有する遺構ではあるまいか。今後類例を集め検討したい。

(10) S I - 10 (第24号住居址：第20図, P L - 9)

本址は、東西5.02m、南北4.82m、壁高0.62mあり、N-49°-Wに主軸を有し、隅丸長方形又は胴張の小判形を呈する。床は、柱穴の内側はしっかりした貼床であるが、柱穴から壁にかけては比較的柔質な床となっており、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。柱穴は、対角線上に4本配置されている。炉址は、住居址の中央北側に配置されており、住居址の主軸より14°東を向き、N-35°-Wに方位を有している。焼土は、ロームが焼土ブロック化したもので、ロームは比較的よく分解している。炉址の北側は攪乱を受けており、上面には、黒色土が堆積している。

覆土は、黒色土・黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土を基準とし、黒褐色土が4層に細分出来るため、計7層がレンズ状に堆積していた。

遺物は、覆土より数点、床面からは東側中央部より4点の弥生式土器が(同一個体)壊れた状態で検出されている。これは鉢型土器で、口径21.0cm、現高7.5cm、底径6.0cmの法量を有している。口縁部には、羽状縄文とS字状結節文が施され、胴部と口縁部を区画したようである。口唇部にも、撚糸が施されている。胴部無文帯と内面には、朱彩が施されている。胎土は緻密で、焼成は良好であり、色調は赤褐色である。

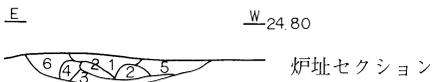
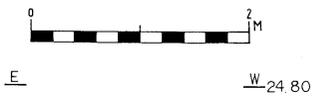
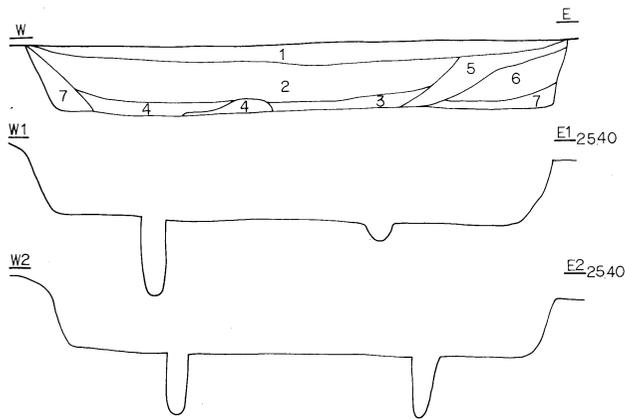
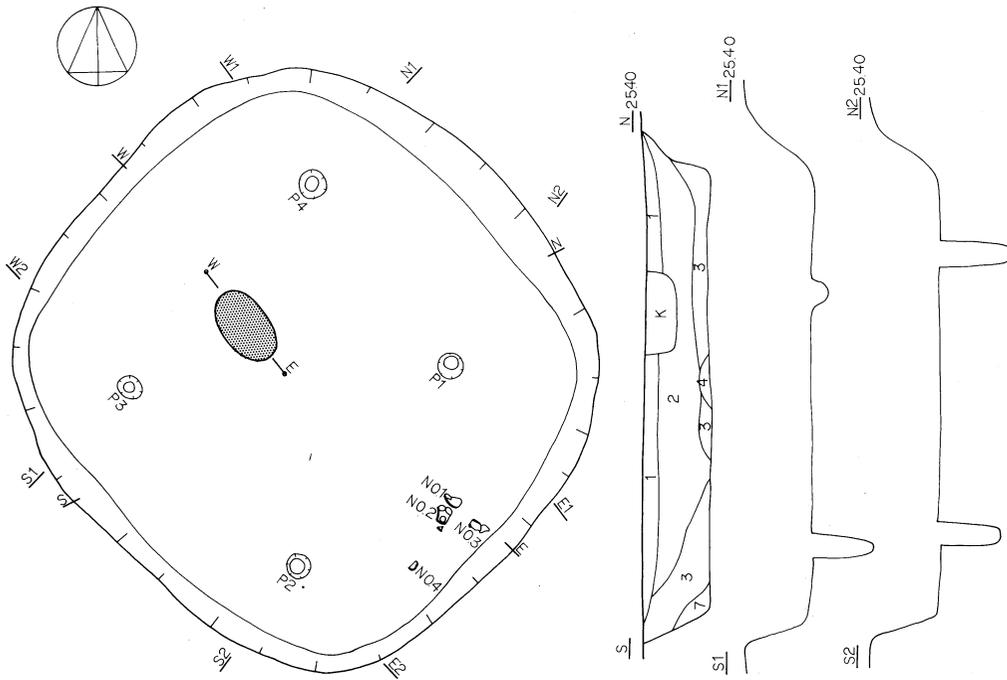


土層凡例

- 1 黒色土 (多量のローム粒子を含む)
- 2 黒褐色土 (ローム粒子を含み白い)
- 3 黄褐色土
- 4 黒褐色土 (少量のローム粒子を含み明るい)



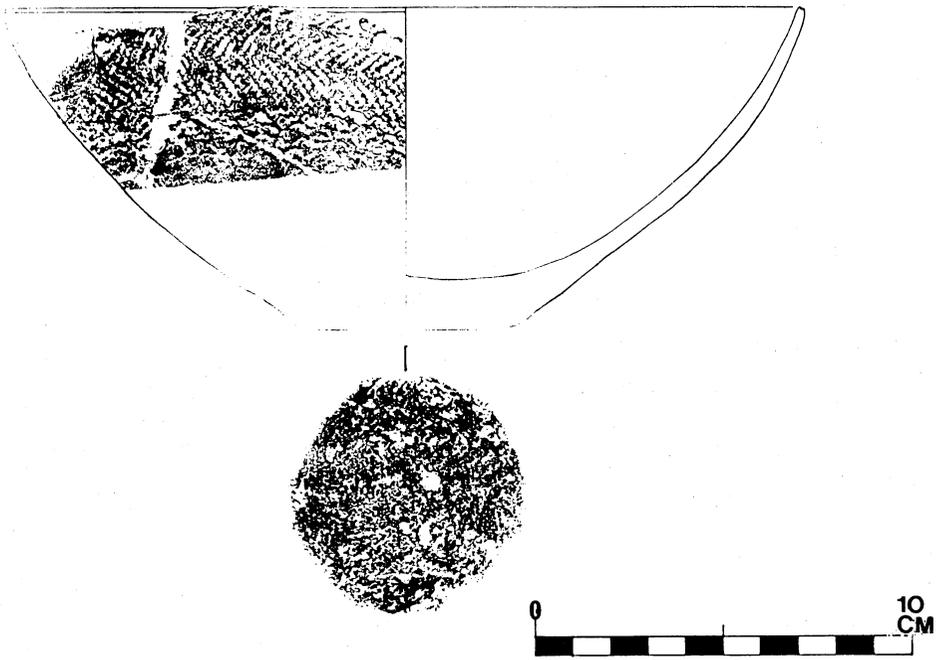
第19図 S I - 9 (第23号住居址) 遺構実測図



- 土層凡例
- 1 黒褐色土 (ローム粒子を含み、明るく柔質)
  - 2 黒色土 (ローム粒子を含み、柔質)
  - 3 黒褐色土 (ローム粒子を含み、柔質)
  - 4 黒褐色土 (焼土粒子とローム粒子を含み、やや赤化)
  - 5 黒褐色土 (多量のローム粒子を含み明るく柔質)
  - 6 暗褐色土 (褐色土粒子とローム粒子を含み、柔質)
  - 7 黄褐色土

- 土層凡例
- 1 黒色土 (粒土粒子を含む)
  - 2 焼土 (ブロック状→ロームの焼き化)
  - 3 黄褐色土 (ロームの分解したもの)
  - 4 黒褐色土 (多量のローム粒子を含む)
  - 5 黒褐色土 (ローム粒子と焼土小痕を含み明るい)
  - 6 攪乱

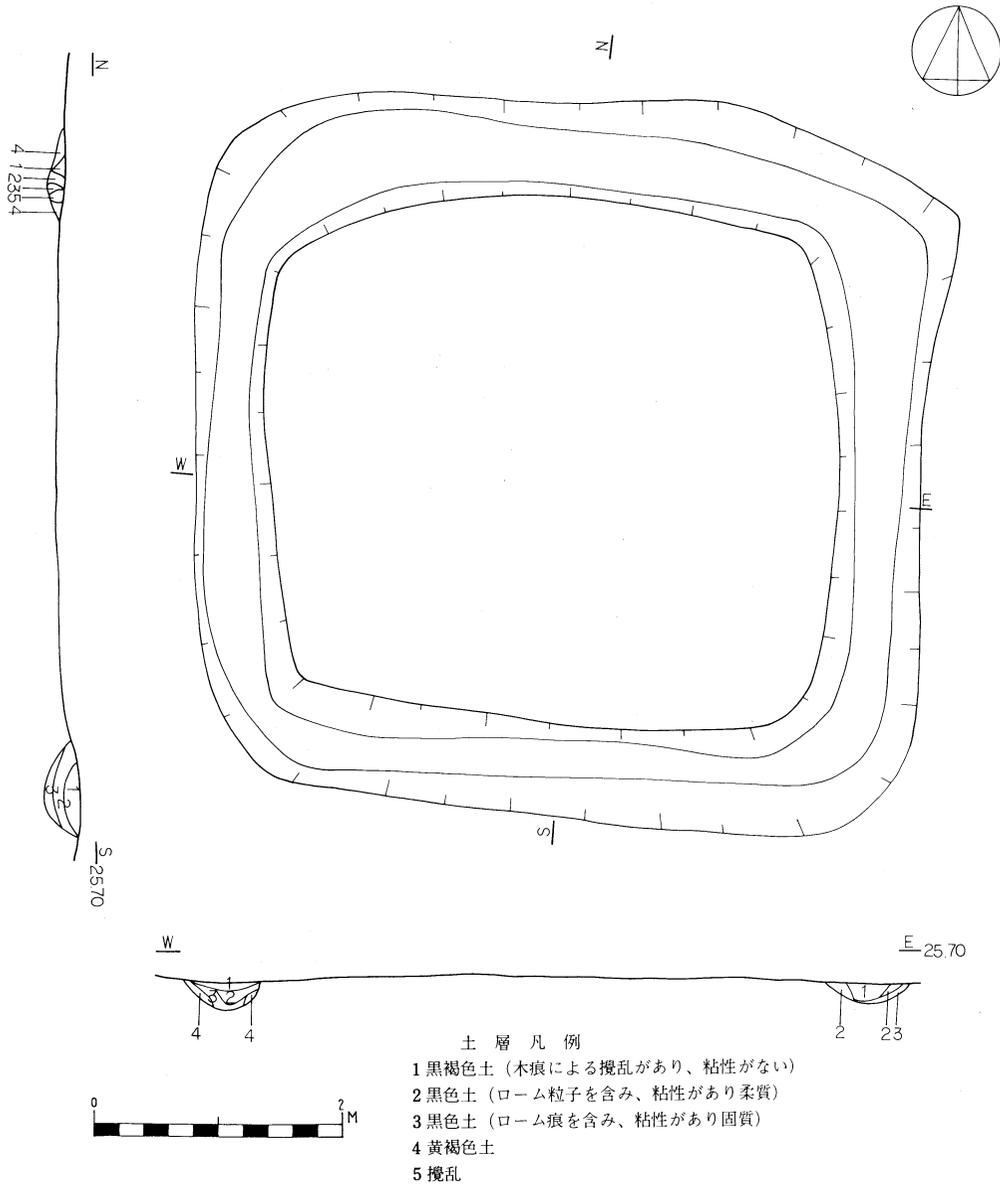
第20図 S I-10 (第24号住居址) 遺構実測図



第21図 S I - 10 (第24号住居址) 出土遺物実測図

## 2. 第2号方形周溝墓 (第21図, PL-3)

検出した方形周溝墓は、東西5.84m、南北5.70mあり、N-10°-Eに方位を有している。東西がやや大きく、各コーナーは丸みを有して全周する。周溝は、幅0.70~0.80m、壁高0.25mをはかり、周溝内には、黒色土・黒褐色土・黄褐色土が堆積している。周溝内覆土より、数点の須恵器坏型土器片が出土したが、図示は出来なかった。また、主体部は確認されなかった。



第22図 第2号方形周溝墓実測図

### 3. 土 壙

#### SK-1 (第5号土壙：第23図、PL-10)

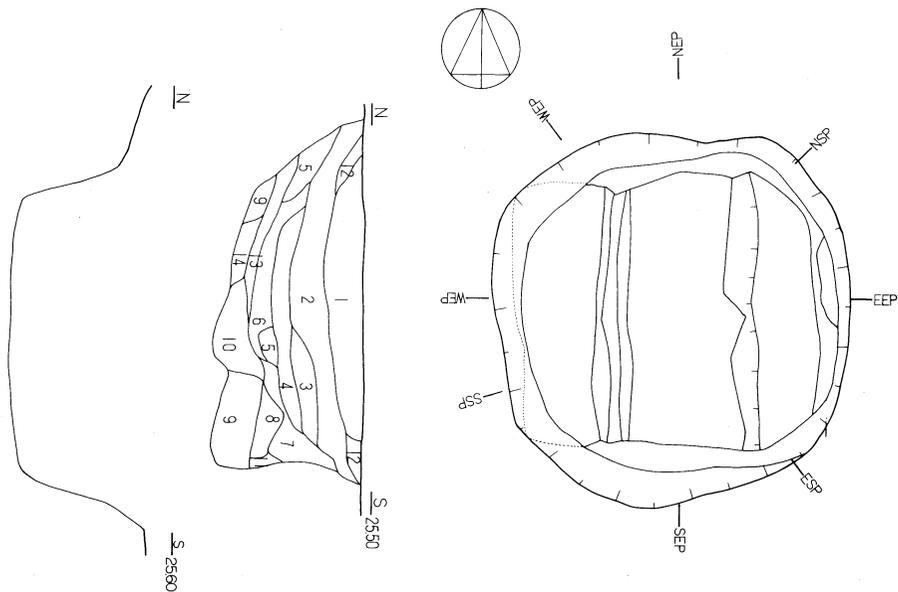
本址は東西3.27m×南北3.40m、深さ1.33mをはかり、長軸はN-0°-Eを示し、隅丸方形を呈する。壙底は平坦だが、一部フラスコ状(西壁部で5~30cm程掘り込む)を呈し、中央部に溝を有する。溝は、幅27cm、長さ227cm、深さ5cmを計測し、南から北へ掘り込まれている。

壙の東壁には2段のテラスがあり、上段のテラスは深さ48cmの所にある。長さ80cm、幅14cmをはかる。下段のテラスは深さ80cmで、長さ35cm、幅60cmをはかる。

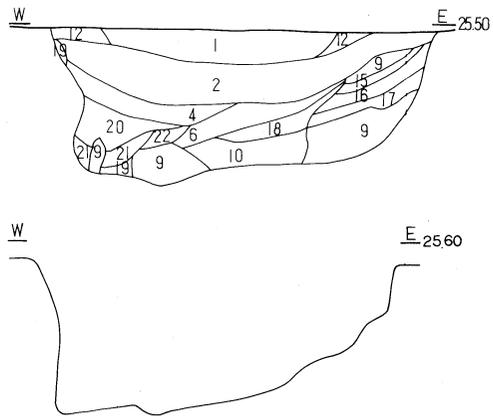
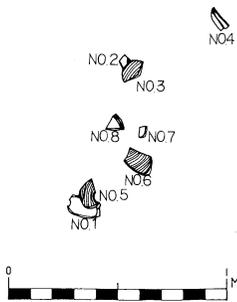
覆土は黒色土・黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土・ローム・ブロックが堆積していた。黒色土が5層、黒褐色土が6層、暗褐色土が6層、黄褐色土が5層に各々細分され、計22層がレンズ状に堆積していた。フラスコ部についても同時限的に堆積したようで、ローム・ブロックを含む土層が交互に堆積し、版築といった状況は確認されなかった。

遺物は第1層より須恵器突手付壺(第24図、PL10)が出土したが、これ以外は検出されなかった。これは頸部以上と突手を欠損するが、現高13.8cm、胴部径15.7cm、頸部4.8cm、底径9.3cmをはかる。肩部はやや張ってはいるが丸味を有し、胴部も丸味を有する。高台部は小さく外傾し、頸部より肩部下位まで自然釉がのこる。突手は肩部下位に1ヶ所確認された。細頸の壺と思われ、時期的には8世紀前後と推定される。

周囲からは本址に関連するような遺構等は検出されず、形状こそ多少異なるが、第Ⅰ次調査の011ピットと同類と思われる。その正確な用途は不明であるが、中央の溝を排水又は水抜き用途と推定すると、地下式倉庫の機能を有するものと思われる。時期的には検出した須恵器が第23図、PL10に示したように投棄的要素を持ち、覆土が自然堆積とは判断しにくい点があり、出土遺物より8世紀前後の時期に比定しておく。



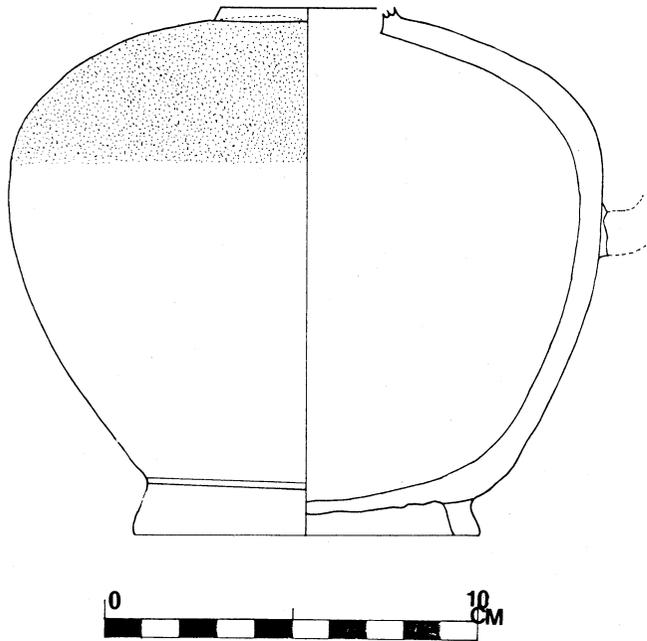
遺物出土状況実測図



土 層 凡 例

- |                                   |   |                                       |
|-----------------------------------|---|---------------------------------------|
| 1 黒色土 (ローム粒子を含み粒性有柔質)             | 9 ローム=ブロック (ハード=ロームよりなるポロポロしている)              | 16 暗褐色土 (多量のローム=ブロックを含み粘性を有し固質)       |
| 2 黒褐色土 (ローム粒子を多量に含み粘性がなくサラサラしている) | 10 黄褐色土 (ソフト=ローム・ハード=ローム・褐色土よりなり固質で粘性を有さない)   | 17 黒褐色土 (少量のローム=ブロックとロームか痕を含み粘性を有し固質) |
| 3 黒色土 (1より明るく暗褐色土を含みやや粘性を有し固質)    | 11 褐色土 (ローム粒子を含み柔質、粘性がない)                     | 18 黒褐色土 (多量のローム小痕を含み粘性がなくサラサラしている)    |
| 4 黒褐色土 (ローム粒子を多量に含み2より明るい粘性を有し柔質) | 12 暗褐色土 (ロームを少量含み粘性が有し固質)                     | 19 黄褐色土                               |
| 5 黄褐色土 (ローム小痕を少量含み暗い粘性有し柔質)       | 13 黒褐色土 (ローム粒子とローム小痕を多量に含み6より暗く粘性がなくサラサラしている) | 20 暗褐色土 (ローム粒子を少量含み粘性がなく柔質)           |
| 6 黒褐色土 (5層を含み2より暗く粘性有し柔質)         | 14 黒色土 (ローム粒子を含み1より明るく柔質で粘性を有す。ポロポロしている)      | 21 暗褐色土 (ローム粒子をわずかに含みやや暗い粘性がなく柔質)     |
| 7 黄褐色土 (黒褐色土を含みくすんでおり粘性がなく柔質)     | 15 暗褐色土 (少量のローム=ブロックを含み固質粘性有)                 | 22 暗褐色土 (粘性がなく柔質)                     |
| 8 黄褐色土 (くすんでおり柔質)                 |   |                                       |

第23図 SK-1 (第5号土壌) 実測図



第24図 SK-1 (第5号土壙) 出土遺物実測図

SK-16 (第21号土壙：第26図, PL-15)

東西1.07m×南北1.04m、壁高0.48mをはかり、長軸はN-53°-Wを示す。形状は隅丸方形を呈し、壙底は丸味を有し、壁は斜めに掘り込まれている。覆土は黒褐色土・黒色土・黄褐色土がレンズ状に堆積している。遺物は出土しなかった。

SK-19 (第24号土壙：第26図, PL-16)

東西0.94m×南北1.45m、壁高0.15mをはかり、長軸はN-30°-Eを示す。形状は楕円形をなし、壙底はほぼ平坦で、北壁と東壁はほぼ垂直的に掘り込まれているが、他壁は斜めに掘り込まれている。覆土は黒褐色土とローム・ブロックが堆積し、遺物は出土しなかった。

SK-22 (第25号土壙：第26図, PL-17)

東西0.75m×南北1.10m、壁高0.22mをはかり、長軸はN-42°-Eを示す。形状は楕円形をな

し、壙底はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は黒色土・黒褐色土・黄褐色土（ローム・ブロック）が堆積している。遺物は検出されなかった。

**SK-23** （第26号土壙：第26図， PL-18）

東西1.03m×南北0.80m、壁高0.40mをはかり、長軸はN-87°-Eを示す。形状は楕円形をなし、壙底は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土は黒色土・黒褐色土・黄褐色土が堆積しているが、遺物は出土しなかった。

**SK-24** （第27号土壙：第26図， PL-18）

東西1.72m×南北2.50m、壁高0.90mをはかり、長軸はN-39°-Eを示す。形状は楕円形をなし、壙底は丸味を有する。

**SK-26** （第29号土壙：第27図， PL-19）

東西2.15m×南北1.00m、壁高0.35mをはかり、長軸はN-63°-Wを示す。形状は隅丸方形で、壙底はほぼ平坦であり、壁は斜めに掘り込まれる。覆土は黒褐色土・黒色土が堆積するが、遺物は出土しなかった。

**SK-31** （第34号土壙：第27図， PL-20）

東西2.10m×南北2.40m、壁高0.21mをはかり、長軸はN-53°-Eを示す。形状は不整円形をなし、壙底は丸味を有する。南壁は緩やかに立ちあがるが、北壁はほぼ平坦面となる。覆土は黒色土・暗褐色土・黄褐色土であった。

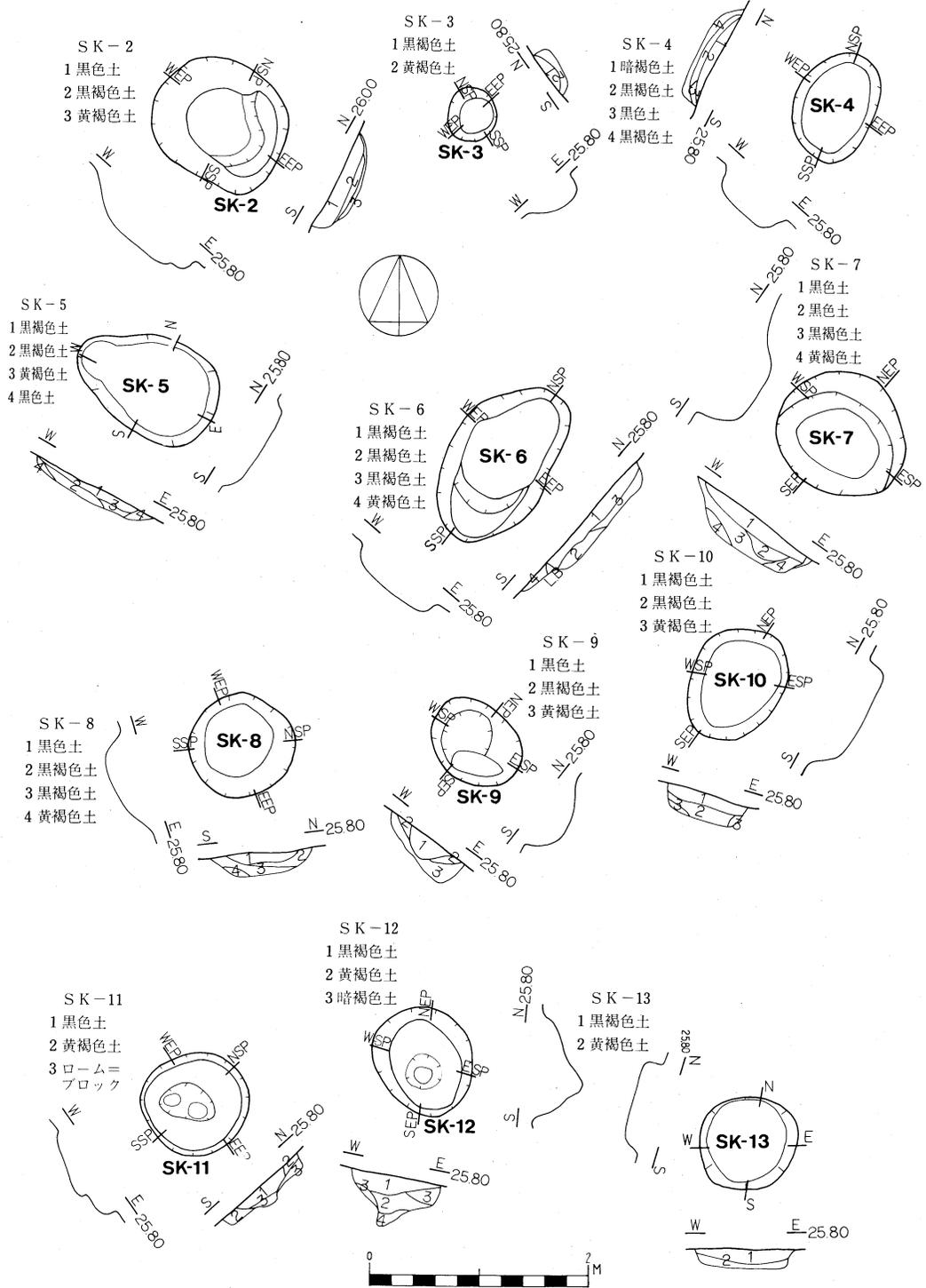
遺物は壙中央より北側にかけて20片余りの縄文式土器片が出土したが、その多くが胴部無文帯である。出土層は第1層及び第2層上面で、時期は中期と思われる。

**SK-35** （第38号土壙：第27図， PL-21）

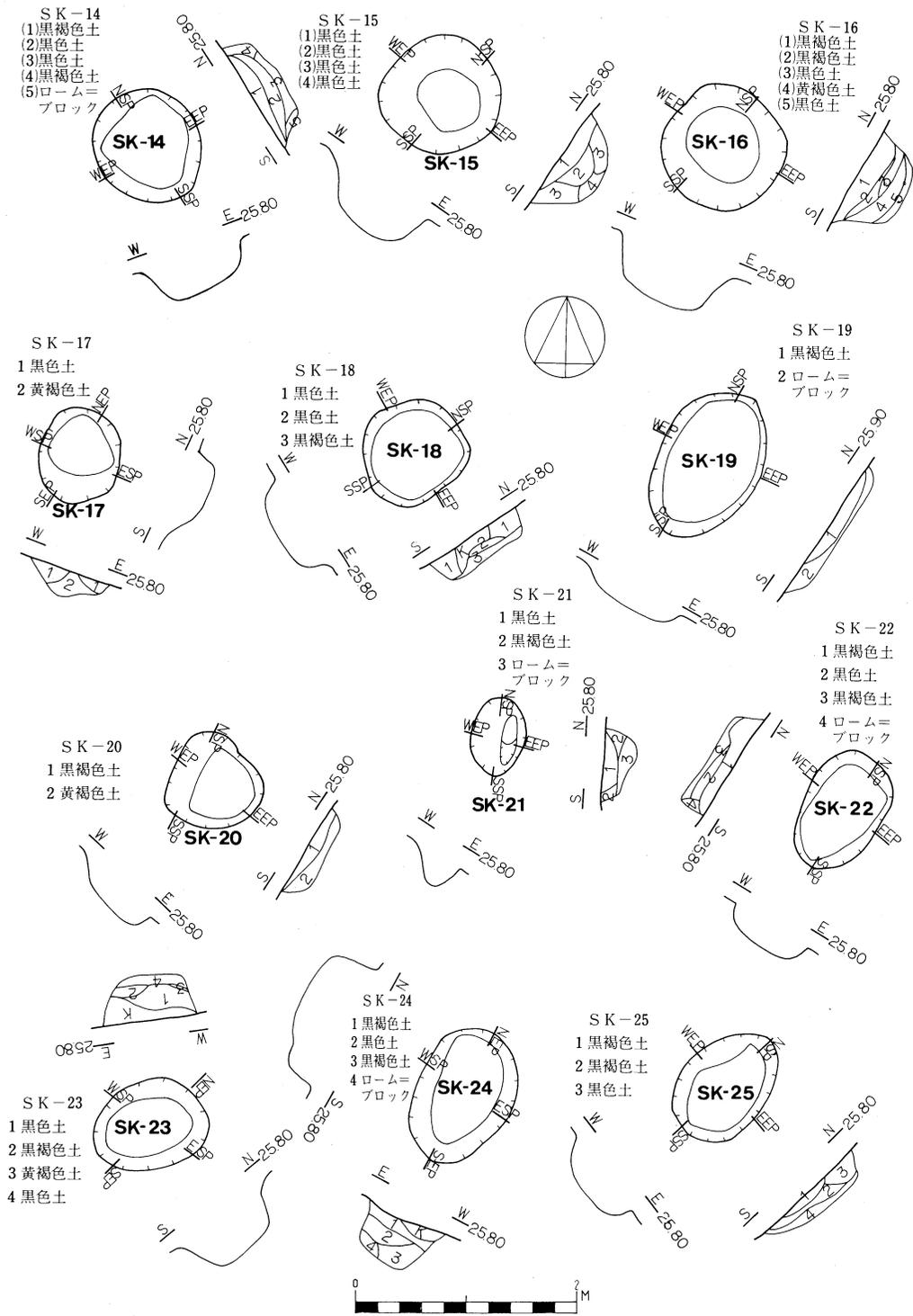
調査区西端で検出された本址は、東西0.98m×南北0.98m、壁高0.50mをはかり、円形をなす。壙底は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

覆土は、黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土・ローム・ブロックが堆積し、暗褐色土と黄褐色土がそれぞれ2層に細分されるため、計7層となる。第1層の黒褐色土層には、焼土を含んでいる。

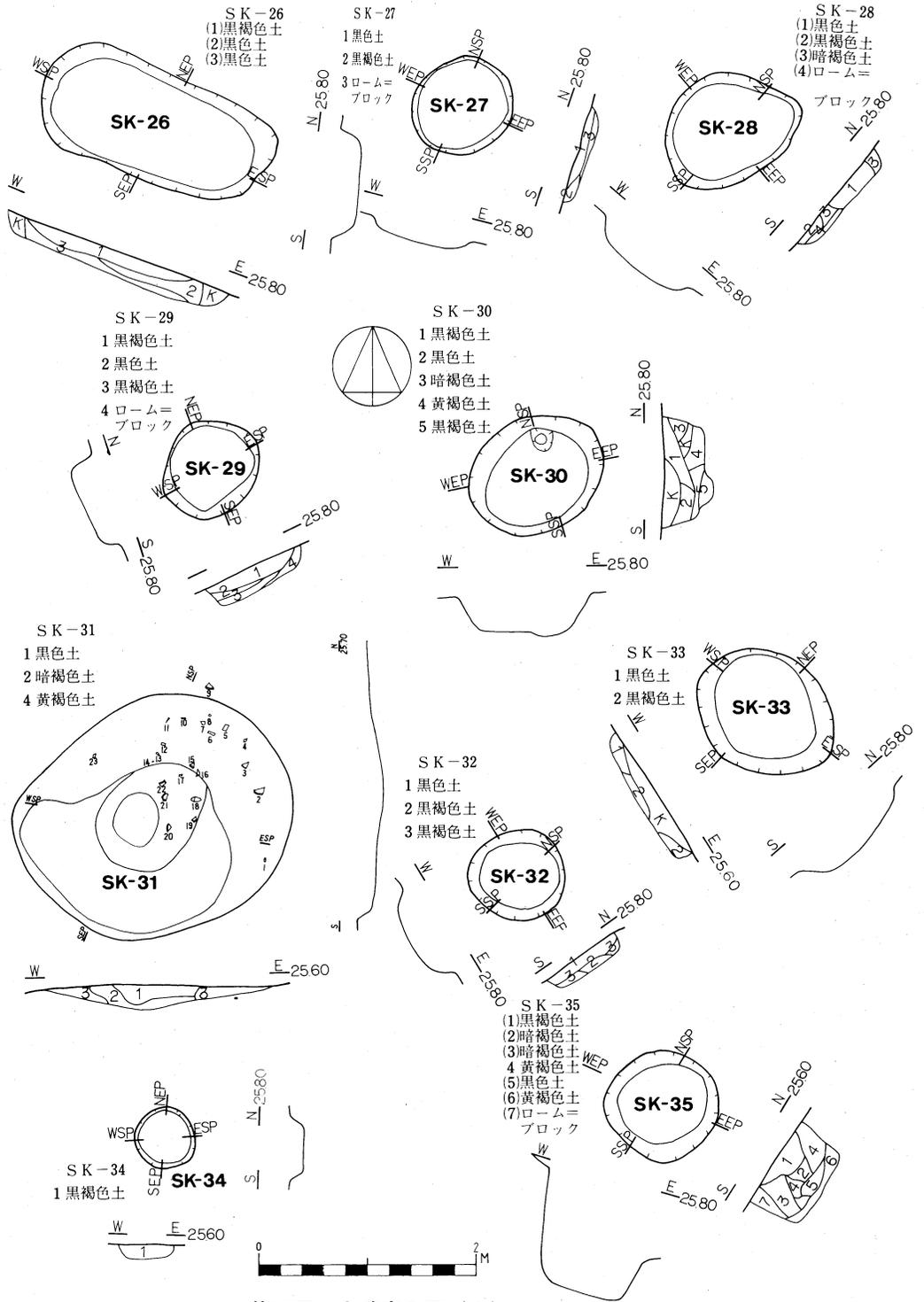
遺物は第1～4層から若干の縄文式土器片が出土したが、いずれも無文部であった。遺物などより、本址は縄文時代中期と思われるが、正確な時期・用途は不明である。



第25図 土壤実測図 (1)



第26図 土壌実測図(2)



第27図 土壌実測図 (3)

#### 4. 炉址及び埋甕 (第28、29図, PL-22)

炉址が3基、埋甕は1点検出されたが、その周囲に関連する遺構など確認されないため、いずれも単独のものと考えられる。

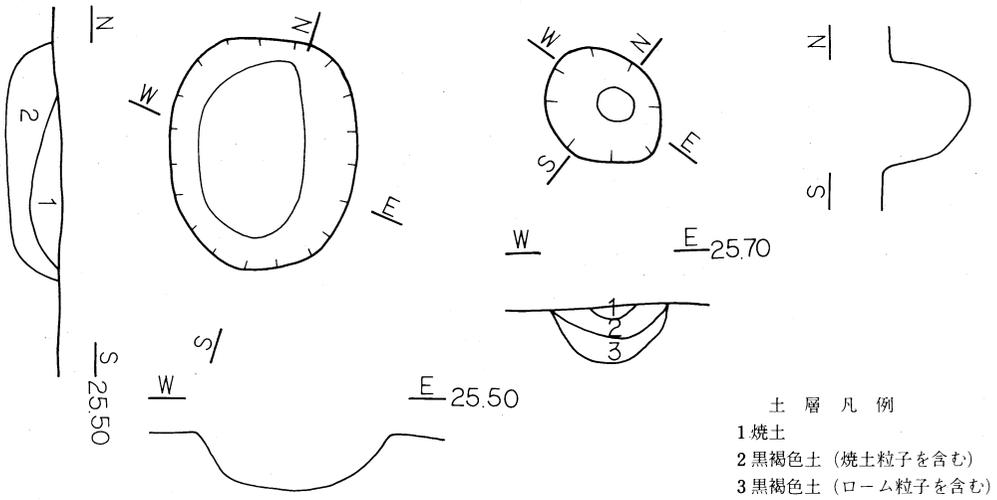
**炉址1.** 東西54cm×南北65cm、深さ15cmをはかり、長軸はN-20°-Eを示す。形状は楕円をなし、壙底は平坦で、壁は斜めに掘り込まれる。覆土は多量の焼土粒子を含む赤褐色土(1層)と、焼けていない暗褐色土(2層)が堆積する。

**炉址2.** 東西37cm×南北30cm、深さ22cmをはかり、楕円形をなす。壙底は丸味を有し、壁はほぼ垂直に掘り込まれる。覆土は焼土(1層)、黒褐色土(2層・3層)からなり、焼土の範囲は小さく薄い。焼土は良く焼けているが、2層は焼土を含む程度であり、3層はローム粒を含む程度でいずれも焼けてはいない。遺物は出土しなかった。N-46°-Wを示す。

**炉址3.** 東西70cm×南北48cm、深さ8cmをはかり、長軸はN-60°-Eを示す。楕円形を呈し、壙底は皿状で、壁は垂直に掘り込まれている。覆土は多量の焼土を含む赤褐色土(1層)と、暗褐色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

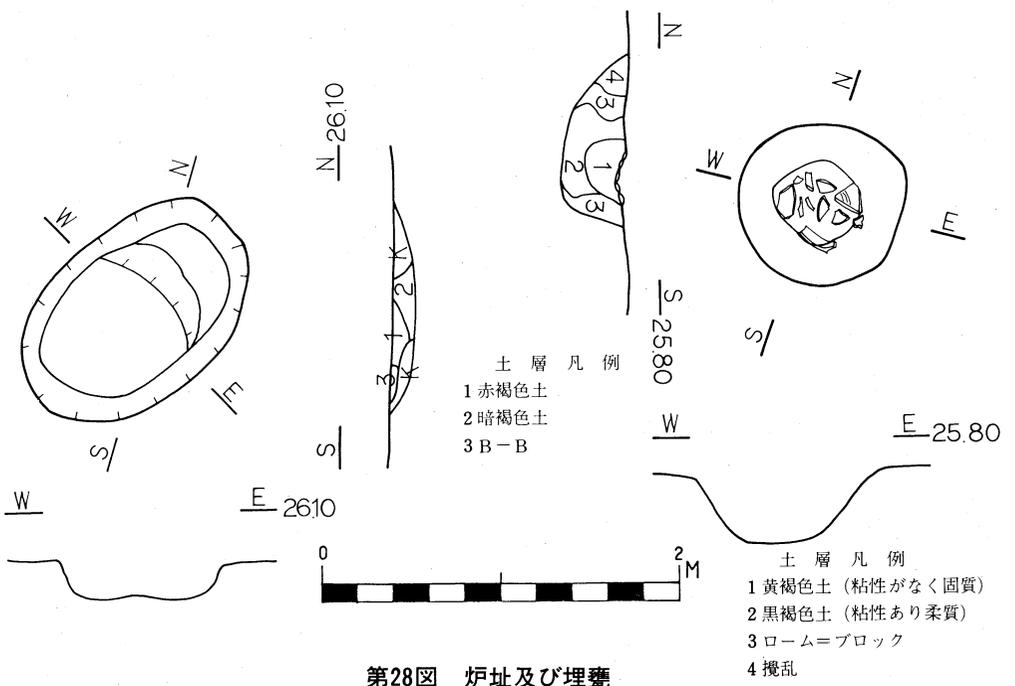
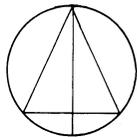
**埋 甕.** 東西48cm×南北45cm、深さ20cmをはかり、長軸はN-0°-Eを示す。円形を呈するピットに、黄褐色土・黒褐色土・ローム・ブロックを用いて基底部を埋めた後、黄褐色土上面に土器を置いている。底部のみの出土で、胴部上手以上は検出されなかった。現高10.7cm×底径14.0cmをはかり、斜縄文を施したのち、縦位の低い隆帯を貼り付けている。胎土は砂粒を含むが緻密で、焼成は普通、色調は暗褐色をなす。

なお、検出状態は設置であり、埋置とは言いがたいが、甕底部が黄褐色土中に存在するため埋甕とした。縄文時代中期と思われる。



土層凡例

- 1 赤褐色土 (焼土粒子を含む)
- 2 暗褐色土 (ローム粒子を含む)



第28図 炉址及び埋壺

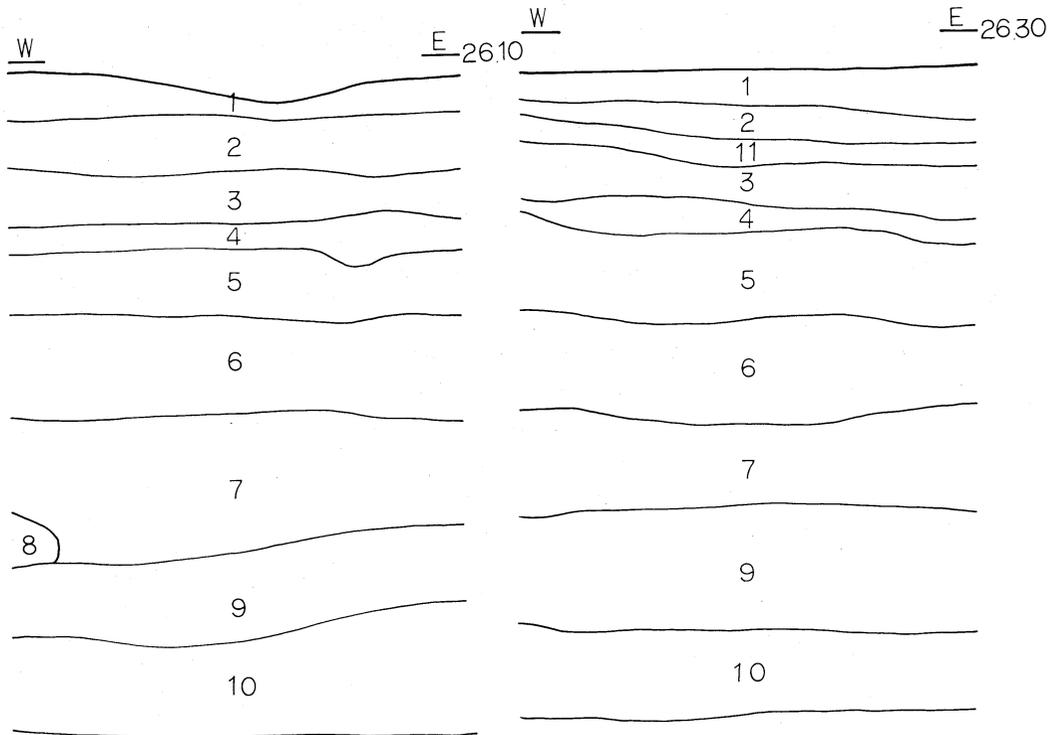


第29図 埋甕出土遺物実測図

## 5. 基本土層

本遺跡が所在する台地の保存状態は良好で、ローム層も良く保存されていたが、黒色土とローム層との接点となる部分がやや混在している。以下に、各層の概略を記すこととする。

- 第1層（表土）層厚10cm程度の、木根による攪乱を受ける層。
  - 第2層（黒色土）ローム粒子を含み、一部攪乱を受ける。層厚は25cm程度である。
  - 第3層（黄褐色土）ソフト・ローム層。
  - 第4層（黄褐色土）黄色度が強く、粘性があり柔質な層。ソフトとハード・ロームの中間層。
  - 第5層（黄褐色土）粘性があり、固質なハード・ローム層。
  - 第6層（黄褐色土）粘性を有するハード・ローム層
  - 第7層（黄褐色土）明るく、粘性があり、柔質なハード・ローム層。
  - 第8層（黄褐色土）黄色度が強く、やや粘性を有し、固質なローム層。
  - 第Ⅸ層（黄褐色土）暗く、粘性があり、固質。パミスを含んでいる層。
- 以上のように9層に分けたが、V～Ⅸ層には総体的にスコリアを含んでいる。



第30図 土層図

## Ⅵ 総 括

以上、第Ⅲ次調査で検出された遺構及び遺物について述べてきたが、これらに関しまとめてみたい。

住居址は10軒検出されたが、第Ⅰ次及び第Ⅱ次調査の結果を含めてみても、集落構成に一定のパターンは認められず、随意に掘り込まれているようである。形状は隅丸長方形、隅丸方形、小判形などを呈し、柱穴は4～5本程度掘り込まれる。4本柱穴は対角線上に配置され、5本柱穴は対角線上の他に、中心線上南側に掘り込まれる。前者はSⅠ-4・5・6・8・10の5軒が、後者にはSⅠ-2がある。SⅠ-7は5本目の柱穴が中心線上南側で南壁に接し、北西方向に1本掘り込まれ、SⅠ-1も1本の柱穴がSⅠ-7と異なるが、いずれも後者に入ると判断される。

炉址は住居址中心線上北側に位置し、住居址主軸と同方向の配置のもの(SⅠ-1・2・7・10)と、北を向くもの(SⅠ-4・5・6・8)とがある。

住居址の主軸の示度をみると、最も北を示すSⅠ-9がN-30°-Eで、最も西を示すSⅠ-8がN-64°-Eであった。規模はSⅠ-5(東西7.12m×南北8.80m)を最大として、SⅠ-3(東西2.80m×南北3.00m)を最小とする。

これらから住居址を、5類に分けることができる。Ⅰ類はN-33°-W～N-39°-W間に主軸を有するもの(SⅠ-3・5・7)、Ⅱ類はN-41°-W～N-49°-W間に主軸を有するもの(SⅠ-4・6・10)、Ⅲ類はN-50°-W～N-55°-W間に主軸を有するもの(SⅠ-1・2)で、いずれにも属さないSⅠ-8(Ⅳ類)とSⅠ-9(Ⅴ類)とである。Ⅰ類とⅢ類はその方位こそ異なるが、規模はSⅠ-3・5を除けばほぼ同じで、Ⅴ類も同様の事が認められ、同時期と推定される。Ⅱ類の住居址は小型であり、前者と時間的な差が感じられる。

出土遺物は弥生式土器を主体として、甕型土器、壺形土器、鉢形土器があり、殆んどは小破片であった。完形品・半完形品としては、SⅠ-4の壺形土器頸部、SⅠ-7の小型壺形土器(3)甕形土器(1)、SⅠ-8の甕形土器(1・2・5)と小型壺形土器(3)、SⅠ-10の鉢形土器(1～3)があげられる。

甕形土器はSⅠ-7.1、SⅠ-8.1・2・4・5があり、SⅠ-7.1は久ヶ原式である。頸部輪積が低く、同期後半に比定されよう。SⅠ-8.4は頸部に3段の輪積が認められ、SⅠ-7.1の輪積に比して消滅化を示しており、時期的に新しいようである。胴部に縄文を施している点などより、北関東系の土器に入ると推定される。SⅠ-8.2は頸部の刻目と沈線間に網目状縄文が施されており、近年千葉県中央部で報告例を聞く。SⅠ-8.1・5は、南関東系の

遺物である。

壺形土器のS I-7. 3とS I-8. 3は、ともに口唇部に圧痕を有するが、頸部に前者は輪積痕がなく、後者は3段残されている。S I-4. 1は頸部片であるが、羽状縄文上にスタンプ状の貼付が、1ヶ所2箇単位で3ヶ所に施される。いずれも久ヶ原式に比定される。

鉢形土器はS I-10よりの出土のみであるが、口唇部に縄文が施され、口縁部には羽状縄文と3段程度の連続S字状結節文が施される。久ヶ原式に比定される。

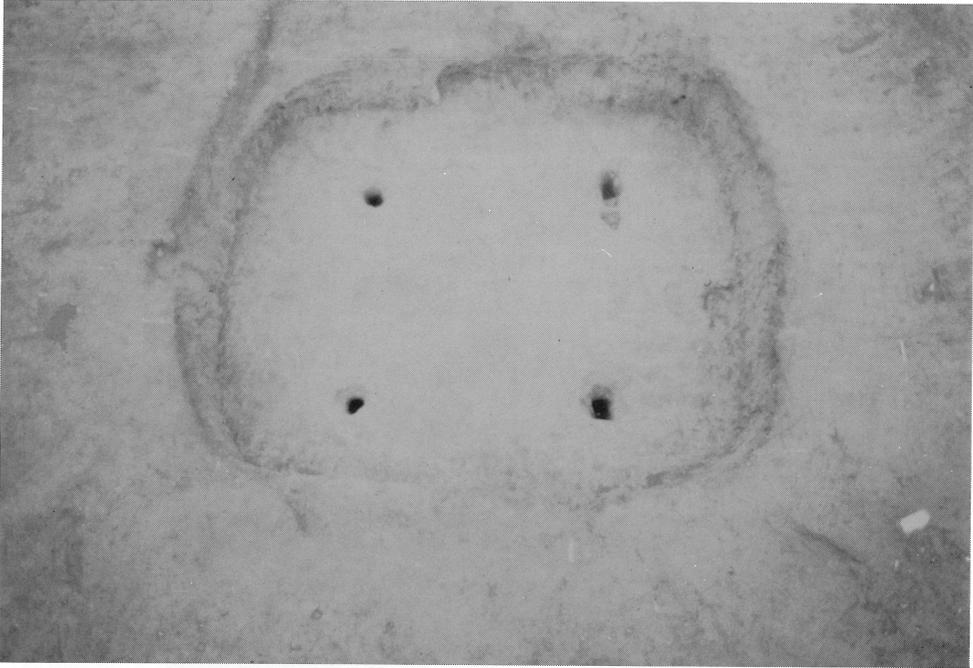
また上記以外に胴部及び頸部の破片があるが、いずれも北関東系の遺物であり、前述の遺物とは好対照をなしている。代表例として、S I-1、S I-4の遺物などがあげられる。

以上、出土物からみると南関東系の久ヶ原式が中心となり、北関東系の遺物もあると言えよう。しかも後者はS I-8の遺物を除くと、いずれも覆土中の出土であった。これらの点から住居址の相異を考えると、I・III・IV類及びII類のS I-10は久ヶ原期と捉えられ、II類は久ヶ原期の後半以降に比定される。また本遺跡も、北関東系と南関東系の接点に位置する遺跡である。

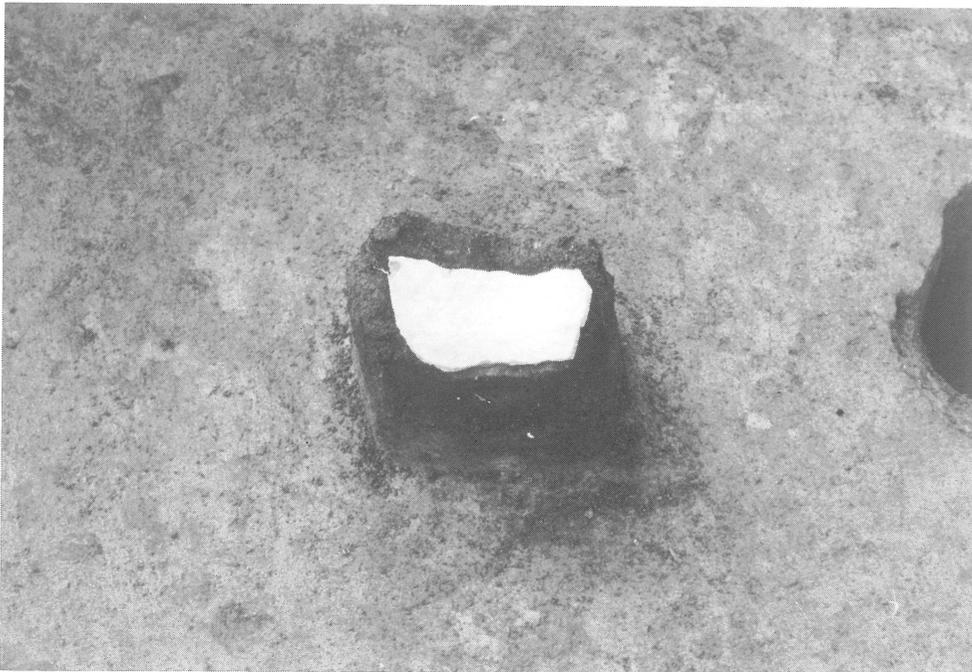
なおS I-3・9であるが、前者は南壁に接し、柱穴状の施設が確認され、炉址は検出されず、後者は柱穴・炉址とも確認されなかった。このため狭義に考えた時、住居址と言えるかなお問題があり、今回は住居址として扱ったが、今後資料の増加をまって十分な検討を加えたい。

版 圖

PL-1 SI-1 (第15号住居址)

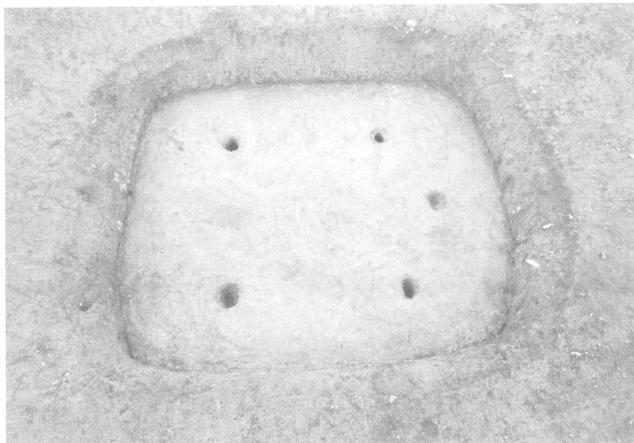


1. 遺構全景



2. 遺物出土状況

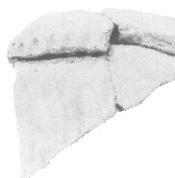
PL-2 SI-2 (第16号住居址)



1. 遺構全景

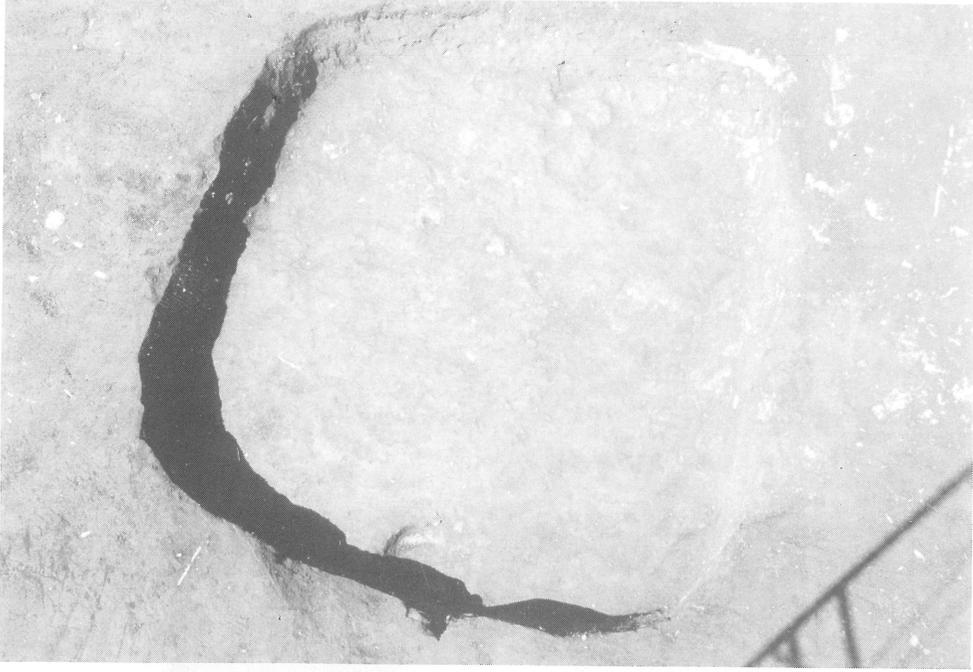


2. 遺物出土状況



3. 出土遺物

PL-3 SI-3 (第17号住居址) 方形周溝墓



1. SI-3 (第17号住居址) 遺構全景



2. 第2号方形周溝墓全景

PL-4 SI-4 (第18号住居址)



1. SI-4遺構全景



2. 遺物出土状況

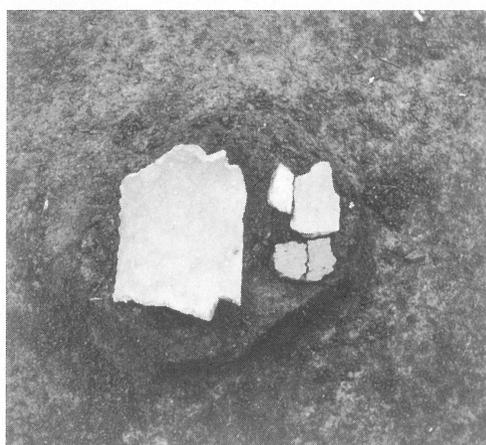


3. 出土遺物

PL-5 SI-5 (第19号住居址)



1. 遺構全景



2. 遺物出土狀況

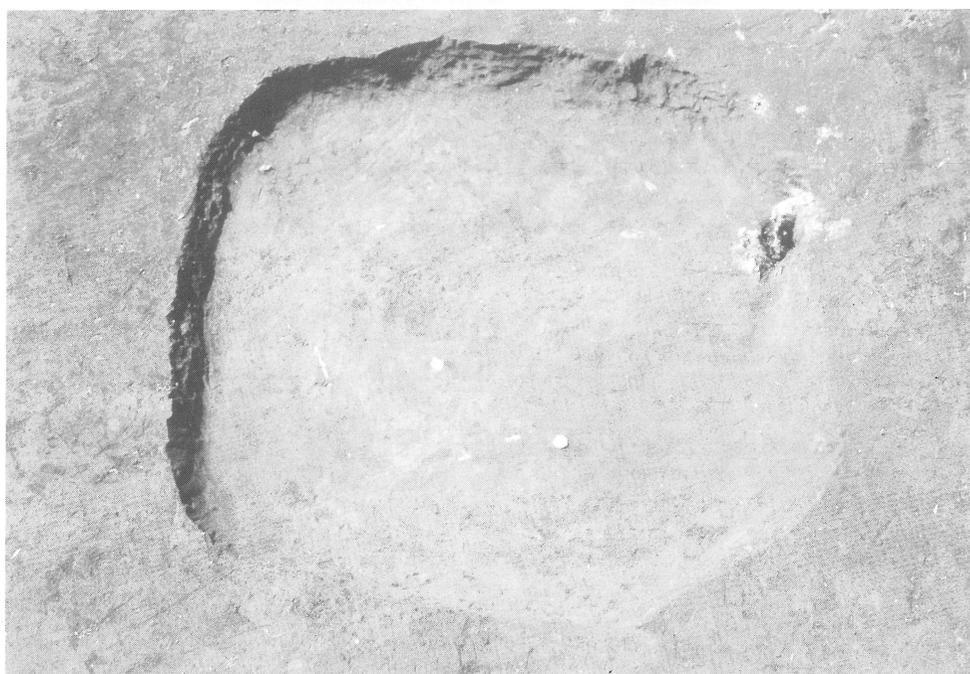


3. 出土遺物

PL-6 SI-6.9 (第20号.第23号住居址)



1. SI-6遺構全景



2. SI-9遺構全景

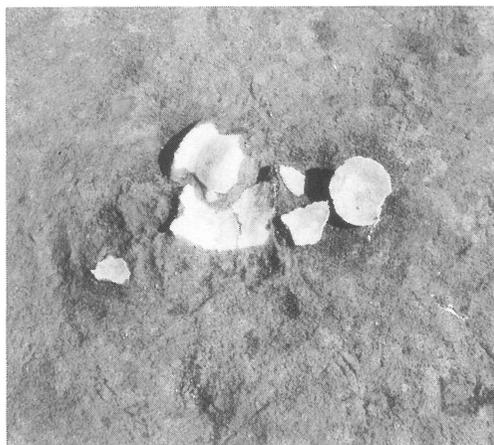
PL-7 SI-7 (第21号住居址)



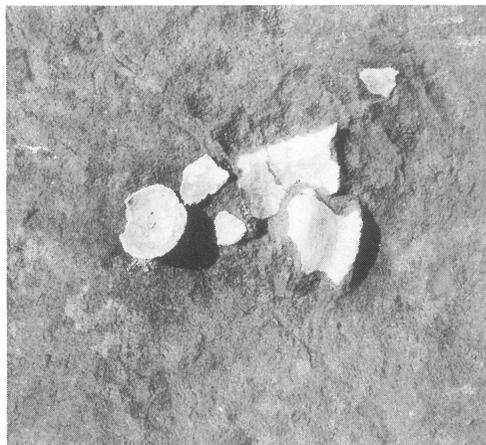
1. SI-7遺構全景



2. 遺物出土状態

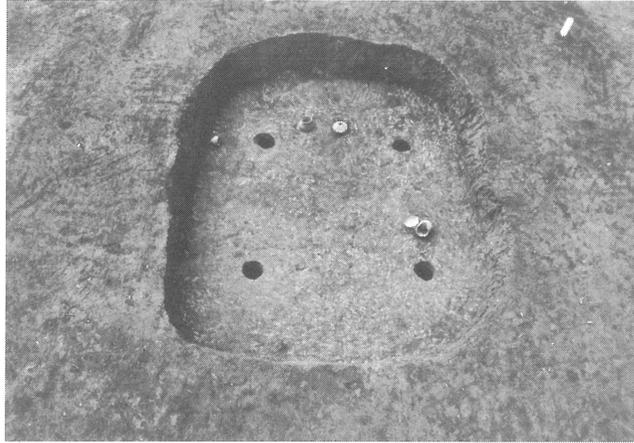


3. 遺物出土状態

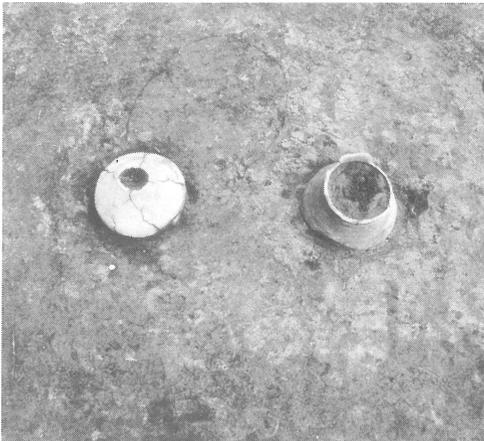


4. 遺物出土状態

PL-8 SI-8 (第22号住居址)



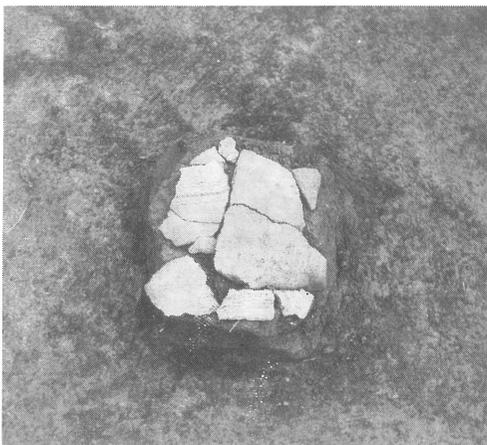
1. 遺構全景



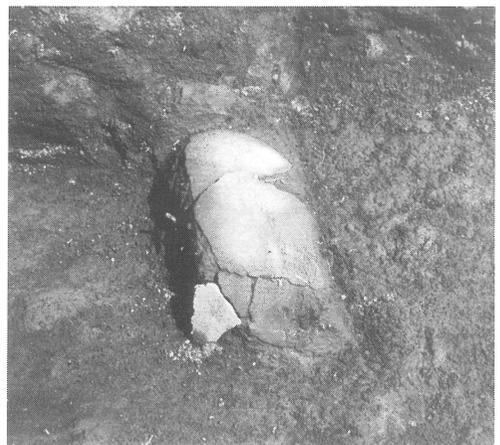
2. 遺物出土状況



3. 遺物出土状況

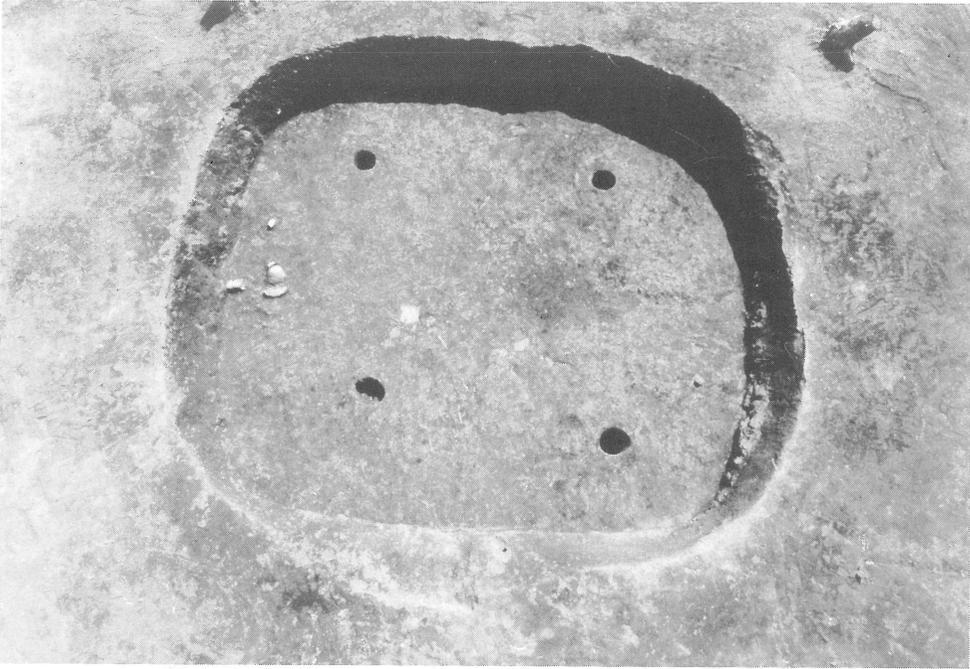


4. 遺物出土状況

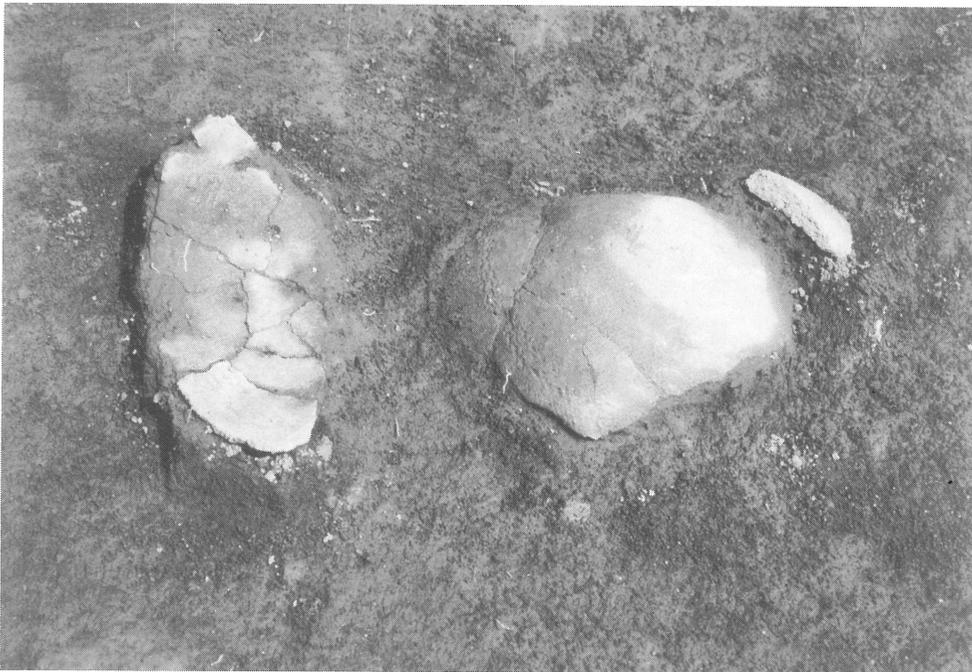


5. 遺物出土状況

PL-9 SI-9 (第24号住居址)



1. 遺構全景



2. 遺物出土状況

PL-10 SK-1 (第5土層)



1. 土層全景



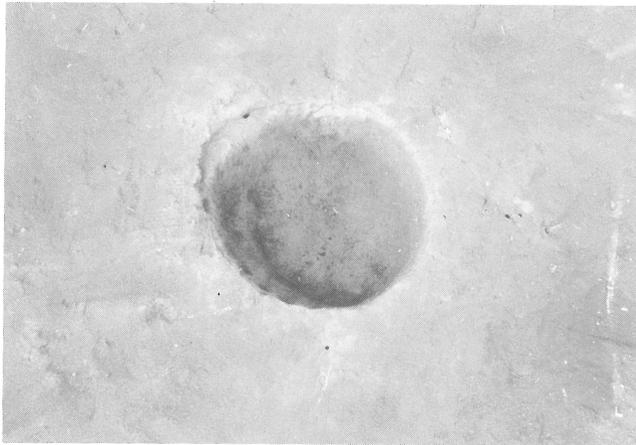
2. 土層・遺物出土状況



3. 出土遺物



1. SK-2土壤全景



2. SK-3土壤全景



3. SK-4土壤全景

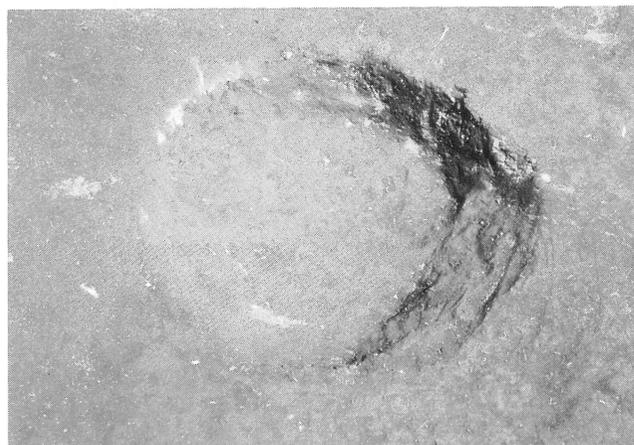
PL-12 SK-5.6.7 (第10.11.12号土壤)



1. SK-5土壤全景



2. SK-6土壤全景



3. SK-7土壤全景

PL-13 SK-8.9.10 (第13.14.15号土壤)



1. SK-8土壤全景



2. SK-9土壤全景

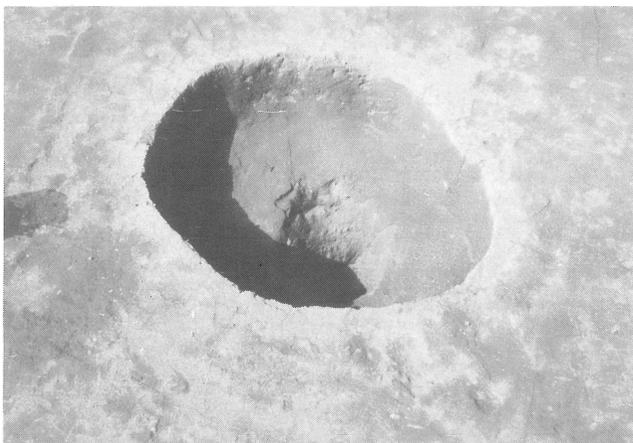


3. SK-10土壤全景

PL-14 SK-11.12.13 (16.17.18号土壤)



1. SK-11土壤全景



2. SK-12土壤全景



3. SK-13土壤全景

PL-15 SK-14.15.16 (第19.20.21号土壤)



1. SK-14土壤全景

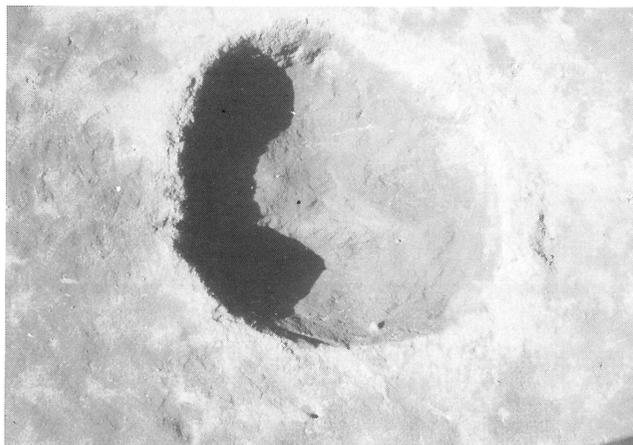


2. SK-15土壤全景

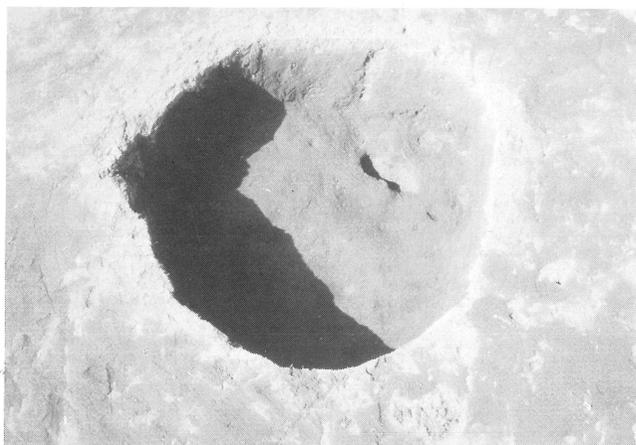


3. SK-16土壤全景

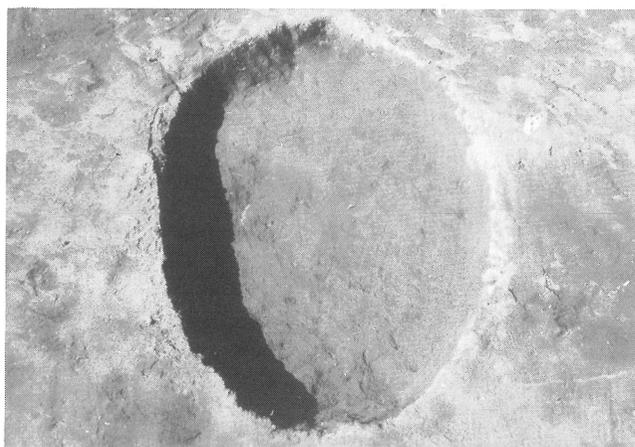
PL-16 SK-17.18.19 (第22.23.24号土壤)



1. SK-17土壤全景

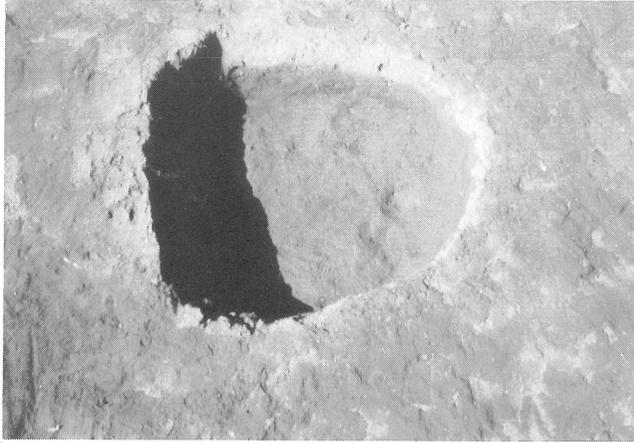


2. SK-18土壤全景

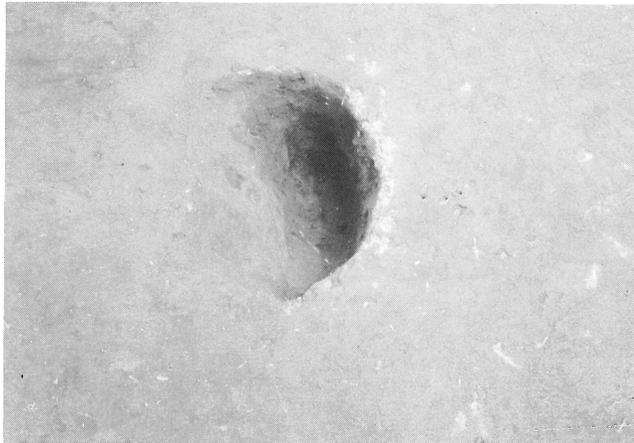


3. SK-19土壤全景

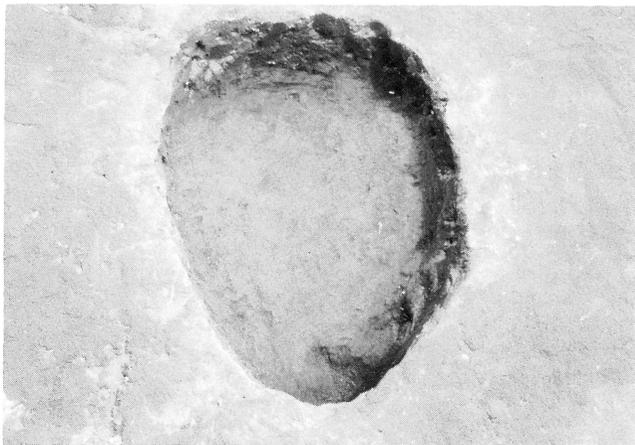
PL-17 SK-20.21.22 (第25.26.27号土壤)



1. SK-20土壤全景



2. SK-21土壤全景

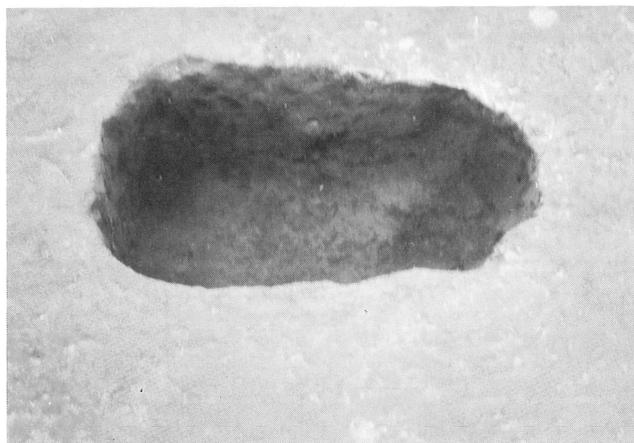


3. SK-22土壤全景

PL-18 SK-23.24.25 (第28.29.30号土壤)



1. SK-23土壤全景



2. SK-24土壤全景

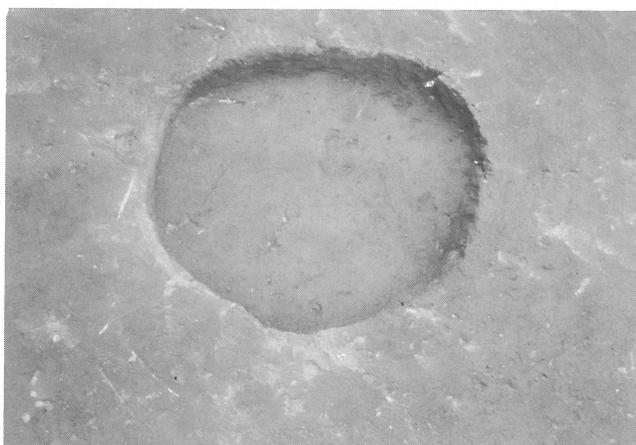


3. SK-25土壤全景

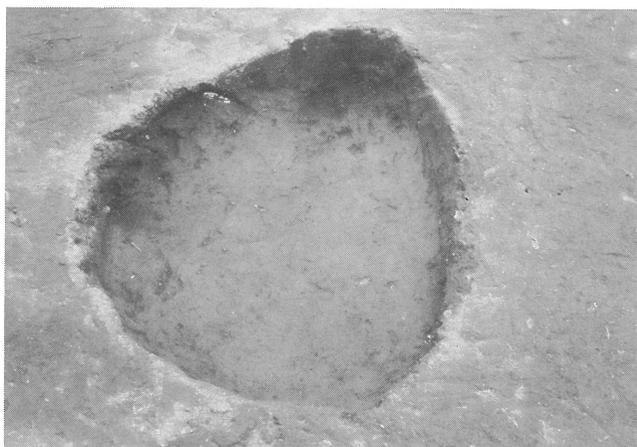
PL-19 SK-26.27.28 (第31.32.33号土壙)



1. SK-26土壙全景



2. SK-27土壙全景



3. SK-28土壙全景

PL-20 SK-29.30.31 (第34.35.36号土壤)



1. SK-29土壤全景

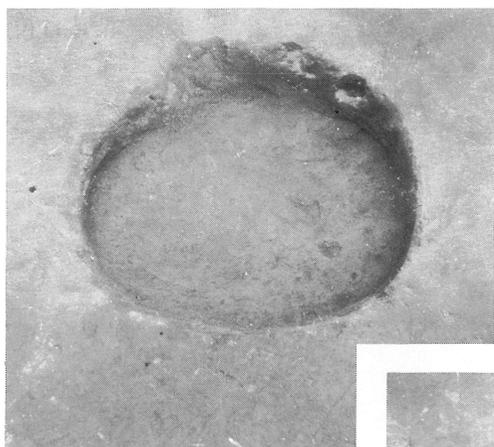


2. SK-30土壤全景



3. SK-31土壤全景

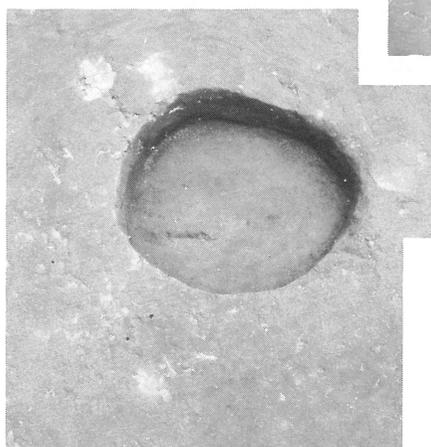
PL-21 SK-32.33.34.35 (第37.38.39.40号土壤)



1. SK-32土壤全景



2. SK-33土壤全景



3. SK-34土壤全景

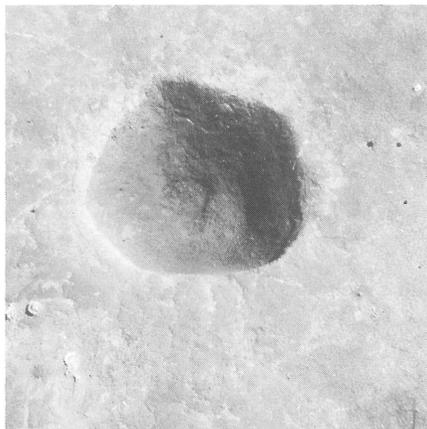


4. SK-35土壤全景

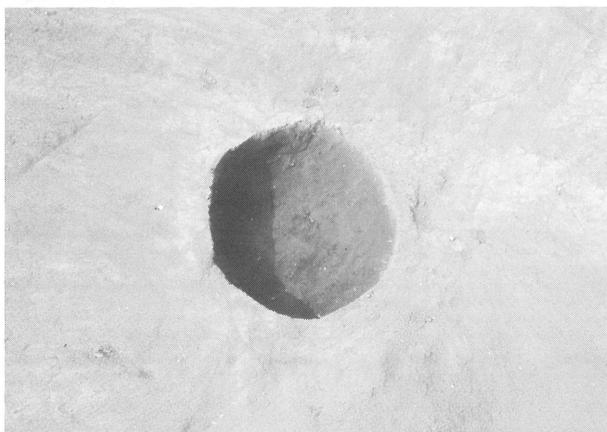
PL-22 埋甕・炉址



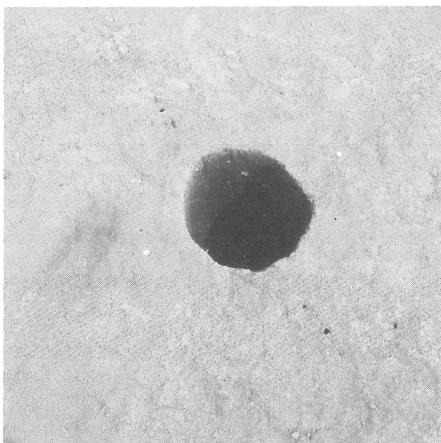
1. 埋甕出土状況



2. 埋甕・発掘状況



3. 炉址(1)



4. 炉址(2)



5. 炉址(3)

PL-23 遺跡全景



PL-24 SI-7 (出土遺物)



1. No 1 甕型土器



2. 甕型土器



3. No. 3 壺型土器



4. 壺型土器



5. No 2 壺型土器片



6. No 2 壺型土器片



7. No 7 底部

PL-25 SI-8 (出土遺物)



2. No 2 壺型土器



3. No 3 甕型土器



1. No 1 壺型土器



5. No. 5 土器底部



4. No 4 甕型土器



6. No. 6 口縁部

千葉県八千代市 阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ

印刷日 1984年3月20日

刊行日 1984年3月31日

発行 八千代市遺跡調査会

〒276 八千代市大和田新田314-5  
八千代市教育委員会・  
社会教育課内

印刷 (株)山下印刷